
悪魔の棲むホームページ

大庭園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の棲むホームページ

【Nコード】

N8585A

【作者名】

大庭園

【あらすじ】

少年圭太は、女性けいたの体への憧れが強く、連日、女性達のビデオ撮影に励んでいた。そんな時、彼は奇怪なホームページと出会う。

第一話：圭太

平成十八年七月、T県T市内のゲームセンターに、少年、野田圭^{のだけ}太は二人の女子高生を連れ込んだ。

学校が終わってから、女性を求めて市内を歩き回り、成功するかどうかも分からない声かけを熱心に続け、時に露骨に嫌悪を示されながらも、繁華街から路地裏まで徘徊すること四時間。圭太はようやく、地元のT県立高校の制服を着た女子高生二人組にありついたのである。

圭太は彼女達と三十分ほどゲームに興じた後、あの手この手で口説き落とし、男子トイレ内に人がないのを確認してから、二人をトイレに連れて行つた。さらに彼女達をボックス内に押し込むと、壁に手をつけて立たせて、自らも中へ入り、鍵をかけた。

「白!」「ピンク!」

圭太はそう叫ぶと、二人のスカートをめくり上げた。

左の子の下着は白で、右の子の下着はピンクだった。

「やった!色が当たった!」

圭太は目を見開いた。そして、持参したデジタルビデオカメラでどちらを先に撮影するか、しばし考えた。顔の好みなら左の子だし、スタイルの良さなら右の子であった。ボックス内の床に膝をつき、両手でスカートを持ち上げたまま、ああでもない、こうでもないと思ひながら、ようやく決心した。

「白いパンツの方をまず撮ろう!」

背負い式のバッグから、ビデオカメラを取り出した。少年の持ち物にしては不釣り合いな、時価二十万円相当のビデオカメラを右手で構え、液晶画面で映り具合を確認しつつ、左手で少女のスカートをめくり上げては、白い下着にレンズを向けて撮影にいそしんだ。

次に、ピンクの下着をはいた子の撮影に移ったが、五分ほどでバッテリーが切れてしまった。圭太はこれ以上の撮影は断念して、ゲ

ームセンターを後にした。

翌日、圭太は何食わぬ顔で学校へ行き、教室の自分の席に座ると、登校してきた友人達に挨拶をしながら、昨日の女子高生二人組の撮影が、バッテリー切れによって中断されたことを、今更ながらに悔やんだ。

充電状態を確認せずに家を出たという失態があるし、長時間の撮影をするのならば、みだりに液晶画面は使用せずに、節電するべきであった。二十件の声かけをして、付いてくるのが一人か二人。ビデオ撮影まで至るのは、さらにその中の数分の一。それが圭太の平均的な成果だったから、撮影ミスは許されないのである。

だが、バッテリーを十分に用意したところで、納得のいく撮影ができるわけではない。昨日のようにトイレ内の撮影では、いつ男性客に気付かれるか知れたものではなく、下手をすれば警察に通報される可能性があった。さらに、圭太のような少年が、夜の町をうろついて女性達に声をかける姿は、おせじにも自然とは言えなかったし、これまた警察に通報される危険性があった。

圭太はクラスメイトに向かって、自分は大金持ちの資産家の息子だと自慢していた。全国有数のエリート校へ進むことが約束されており、今は超一流の家庭教師を付けて、毎日勉強にいそしんでいると吹聴していた。

そんなクラスメイトへの建前がある以上、圭太はどうしても、警察に補導されるなどという失態を演じるわけにはいかなかった。かといって、女性達の撮影をやめる気は少しもなかった。

（トラブルがあっても、余裕を持って撮影を続けられる。人目を気にすることなく、思う存分、撮影に没頭できる。そんな、確実な撮影方法がないだろうか）

午前の授業が終わり、給食をたいらげ、昼休みになった。

永山芳樹が、圭太の席に近づいてきた。芳樹の手には、大人向け

のファッション雑誌が握られている。芳樹はおもむろに雑誌を広げ、女性モデルの水着写真　彼らにしてみれば随分大きなお姉さんに見える　を、圭太の眼前に広げた。圭太の目に、白いビキニを着た、女性モデルの胸の谷間が飛び込んでくる。圭太は、体が一瞬熱くなるのを感じた。しかし、芳樹は圭太の興奮をからかうように、ページをすぐに閉じた。芳樹の顔は「少ししか見せてやらないよ」と得意そうだった。圭太は頭に血が上るのを抑えながら、心の中で「この豚！」と唱えた。

圭太は小太りで肥満を気にしていたが、芳樹は圭太顔負けの超肥満児であった。

二人は、今年四月のクラス替えで晴れて同級生となったが、席替えをしても隣り合うようなことはなかったし、遊びの嗜好が合うわけでもなかった。それでも芳樹は、圭太と無関係でいる気は少しもないようで、圭太の容姿にケチをつけては、あの手この手の嫌がらせを四月早々から始め、現在においても、彼の嫌がらせは少しも衰えることはなかったのである。

放課後、圭太は自分専用の家賃三十万円の高級マンションへ帰宅した。このマンションは、その豪華さから不動産屋の間ではよく知られた物件で、市内の富豪達が多く入居し、五階建てで、全部で二十部屋あり、圭太の部屋は三階の302号室であった。

圭太はドアを開けると、リビングを通り過ぎて、PC室と自ら名付けた八畳間の部屋へ入った。そして、時価二十五万円相当のデスクトップ型パソコンを立ち上げると、昨日撮影した女子高生二人組の映像の編集に取り掛かった。まずは白い下着の少女の映像が手際良く編集されて、DVDに記録された。ケースにはタイトルが書き込まれた。「T県立高校三年二組山内真由美」。圭太は、少年とは思えぬ慣れた手つきでタバコに火をつけ、引き続いてピンクの下着の少女の映像の編集に取り掛かった。これは五分と経たずにバッテリー切れになった問題作で、映像はすぐに終わってしまった。仕方

なく、DVDケースに「T県立高校三年二組北原陽子（途切れる）」と書き込んだ。

圭太は二本目のタバコに火を付け、二十畳の広いリビングへと移り、高級ソファに座ると、出来上がったばかりのDVDを、これまた高価な大型ワイドテレビで鑑賞した。

ここで思い出されるのは、昼の芳樹の一件であつた。圭太はここ半年あまり、女子高生を始めとして、数多い女性達に声をかけ、自作DVDを製作してきた。作品の中には、女性達の下着が映っているものも多い。それなのに芳樹ときたら、雑誌の水着写真を見せびらかして　しかも、芳樹が見せた水着モデルよりも、今、画面に映っている女子高生の方がよほど美人なのにも関わらず　悦に入っていた。

（この映像を見たら、あいつはどんな顔をするんだろうか？）

ワイドテレビには、スカートをめくり上げられた女子高生の姿が映し出されている。少年の圭太には、十分刺激のある映像だった。

ブルブル……。

ソファの前に置かれているガラス張りのテーブルの上で、電話が鳴った。圭太はリモコンでテレビのボリュームを下げると、白い受話器を取った。

「もしもし、圭太だけど」

「お母さんだけど、今、家庭教師の先生がこっちに来てるの。圭太の部屋へ向かわせていい？」

「気分が乗らないから、家庭教師はもう要らないって言ったでしょっ？」

テレビ画面では、白い下着の女子高生の映像が終わった。圭太は「T県立高校三年二組北原陽子（途切れる）」のDVDをセットする。

「俺の部屋には誰も入れたくないんだよ」

圭太は乱暴に受話器を置き、て母との会話を打ち切った。ソファに寝転んで三本目のタバコに火をつけると、リモコンを掴んでテレビのボリウムを元に戻し、口から煙を吐きつつ、テレビ画面を眺めた。

圭太がクラスメイトに吹聴していた話の中で、大金持ちの資産家の息子であるというのは紛れもない事実であった。圭太の実家は百坪を超える三階建ての大豪邸。圭太用の子供部屋など、複数用意することも可能だった。だが、圭太の父は、勉強に専念できる環境を作るためだと、この檜風呂の付いた高級マンションを息子に貸し与えた。さらに三十万円の小遣いを毎月与え続け、その上、名の知れた家庭教師も雇った。圭太の父の資金力は、これだけの出費があっても、実家の生活になんら影響がないほどであった。

第二話：奇怪なホームページ

七月中旬。

一学期最後に行われたテストが返却されたが、その惨憺たる結果に、圭太はショックを隠せなかった。

受け取った五枚のテストはいずれも三十点台。予想をはるかに下回る結果だった。その上、その点数をクラスメイト達に見られてしまったため、苦しい屁理屈　家では難解な問題を解いているので、学校のテストぐらいでは、かえって解きにくいのだ　を言って周るはめになってしまった。

芳樹の点数が気になってテスト用紙を覗いて見たが、彼はいずれも八十点以上であった。

圭太は超一流の家庭教師に学んでおり、芳樹の方は家庭教師はもちろん、塾にさえ行っていないはずなのに。

夏休み直前の短縮授業が終わり、圭太は足早にマンションへ帰宅した。リビングに入るなり「ちくしょう！」と怒鳴って、学校用力バンを壁に投げつけた。すぐに撮影用バッグを背負うと、マンションを出て自転車に飛び乗り、女性を求めて出発した。

圭太の住む町は、人口二十万人の中規模の都市で、市内には中学校が十校、高校は五校あった。さらに圭太のマンションから歩いて十分ほどの場所に私立大学もあったから、圭太好みの若い女性を見つけるにはまずまずの環境であった。市内を巡回すれば、これらの学校の女子生徒達を多く見つけられたし、駅前に行けば、これから市外の実家へ帰ろうとする彼女達を捕まえることも出来た。

初夏の日差しを浴びながら、圭太は熱心に自転車を漕ぎ、好みの女性を見つけては、人目のつかぬ場所へ連れ込もうと、あの手この手で話し掛けた。だが、テストのショックで精神状態が乱れているのだろうか、会話がおぼつかず、ついてくる女性は一人も現れなかった。

蒸し暑さで溢れ出てくる汗が、圭太のシャツをずぶ濡れにした。それでも粘って五時間あまり市内を徘徊したが、全く成果が上がらないため、圭太は声かけは断念して、その代わり、好みの女性を見つけると自転車で後を付けていつて、左手でハンドルを持ち、右手でカメラを構えて、こっそり女性の後ろ姿を　特に尻が映るようにレンズの向きを調整して　撮影し、それからカメラを前カゴに入れて右手を自由にすると、自転車で追い抜きざまに尻を触って逃走するという痴漢行為を始めた。市内中の女性達を追い掛け回して、十件ばかりの痴漢行為を行った。

夜十時過ぎに帰宅すると、圭太は檜風呂で汗を流し、新しいシャツに着替えて、PC室に閉じこもった。

パソコンを立ち上げて、今日撮影した映像の編集を始めたが、自転車に乗りながらの撮影が祟ったのか、女性達の尻は全く撮れておらず、上下に激しく揺れるだけで、何が映っているのか分からない、意味不明の映像が、延々と続くだけであった。

こんな映像のために、手間のかかる編集作業をする気にはなれなかった。

編集画面を閉じ、ネットサーフィンを始めた。

時計は夜の十二時を回っていた。

女子高生関連の掲示板・女子大生関連の掲示板・新型デジタルビデオカメラの掲示板……。

「確実に」「撮影」と入力して検索ボタンを押した。

検索結果が表示された。その内容に、圭太は驚きの声を上げた。

「何だ？このサイトは？」

検索結果が縦に二十件、ずらりと並んでいたが、その一番上に、圭太が入力した検索ワード通りの、「確実に撮影」という名のサイトが表示されていた。圭太は思わずつぶやいた。

「確実に、撮影」

圭太はサイトの名前から自分と同じ嗜好を持つ人間の匂いを感じ

取り、サイト名の上に矢印を移動させると、静かにクリックをした。

『確実に撮影』

ようこそ。我がサイトへ。

仲間がいてくれて嬉しいよ。

大人も子供も私は区別しない。

皆、存分に、性欲を満足させるべきだ。

「入り口」

赤い背景に、白い文字で、管理人が書いたと思われるメッセージが載っていた。

子供も大人同様に扱うという管理人の言葉に、圭太は好感をもった。

「入り口」をクリックすると、画面が切り替わり、三つの選択肢が現れた。

「撮影方法」 「撮影手段」 「撮影技術」

「どれも似たようなものじゃないか。この三つのうち、どれをクリックすればいいんだろう？」

圭太はとりあえず、「撮影手段」を選んでクリックした。

「老人」 「大人」 「子人」

「こびとつて読むのかな？俺はこれだよな」

圭太は「子人」をクリックした。

「金銭」 「合意」 「強制」

「俺は強制の方が好きかもな」

圭太は「強制」をクリックした。

「スタンガン」 「手錠」 「睡眠薬」

「さつきから出てくる、この三つの選択肢は、一体何を意味するんだろう？」

赤い画面を見つめながら、圭太は悩んだ。どうも物騒な選択肢だ

った。同じ嗜好の人間が運営しているようだが、信頼できるサイトかどうか分からないまま、このままクリックを続けるのは危険ではないか？

圭太にとって自信のあるパソコン技術は映像編集のみであり、悪質サイトなどのトラブルに対しては全くの素人であった。

深みにはまりそうな気がして不安になり、気が変わった圭太は、急遽サイトから出ることにして、ウィンドウ右上の「閉じる」に矢印を合わせ、クリックをした。

だが、画面は閉じられなかった。代わりに赤い画面が映し出され、中央に白い文字で、

「確実に撮影してください」

と表示された。圭太は再び「閉じる」をクリックした。

「確実に撮影してください」

やはり、同じ画面が映し出されるだけだった。

「サイトから出れないぞ。どうしよう？」

時計は夜中の一時を過ぎていた。

冷静になるよう自分に言い聞かせながら、画面を右から左、上から下へと、くまなく見つめてみると、左下に小さく「戻る」と書いてあるのを発見した。圭太はトップ画面に戻れることを期待して、

「戻る」をクリックした。

「スタンガン」「手錠」「睡眠薬」

先程の画面に戻ってしまい、物騒な選択肢が再び並んだ。

「また、ここか」

圭太は「戻る」の表示を探したが、この画面に「戻る」はどこにも書いてなかった。だからといって「閉じる」を選んでも、「確実に撮影してください」の画面に行ってしまうだろうし、そこで「戻る」をクリックすれば、またここへ戻ってきてしまう。

圭太はタバコに火を付け、煙の向こうに見える赤い画面と対峙した。

「『確実に撮影』というサイト名だから、ここに並ぶ三つの選択肢

は、文字通り、確実に撮影するためのアイテムなんだろう」

「つまり、目標を長時間拘束するためのアイテムを売っているというわけか」

タバコを灰皿に置き、マウスを握った。

「俺は睡眠薬が一番確実だと思う」

矢印を「睡眠薬」に合わせ、クリックをした。

『買い物力ゴ』

ただいま「睡眠薬」が一箱入っています。

現在のお買い上げ金額は、一万五千円です。

あなたの氏名・郵便番号、住所を入力してください。

切り替わった画面を見て、圭太は少し笑った。

「ただのネットショッピングじゃないか」

この画面にも「戻る」の表示はなかった。そのため「閉じる」をクリックするしかなかったが、あいかわらず「確実に撮影してください」の画面へ行くだけだった。

「どうしても商品を買えというわけか。こんな怪しいサイトで住所氏名を入力して、買い物なんてするわけないだろう！」

そうつぶやくと、圭太はパソコンのコンセントを抜いた。

赤い画面はプツンという音ともに、一瞬で真っ黒になった。

「電源を切っちゃえばいいもんね！」

灰皿のタバコの火を消すと、圭太はリビングへ移り、女性達が映った自作DVDを数枚鑑賞してから、眠りについた。

第三話：虚栄の積み重ね

奇妙なホームページに出会ってから数日後、圭太の周りにはもう一つ、奇妙なことが起こった。

肥え太った巨体を見せびらかして幅をきかせ、圭太への嫌がらせを繰り返してきた芳樹が、突然、学校に来なくなったのである。

不信に思った圭太が担任教師に確認すると、芳樹は夏風邪をこじらせているとのことであつたが、とても信じられなかった。

きつと何か企んでいるに違いない。圭太は芳樹を疑り続けた。

次の日も、その次の日も、芳樹は学校には来なかった。

七月下旬、一学期最終日。

待ちに待った終業式がやって来た。

広い体育館に全校生徒五百名が整然と並び、ステージでは、マイクの前で校長が熱心な講話を行っている。

夏休みを控えて機嫌が良いのか、退屈な講話を聞かされても、生徒達の表情は明るかった。

圭太は、背丈順に並んだクラスメイト達の、前から三番目に並び、時折、校長の話にうなづく仕草を見せたが、頭の中では夏休みの間、女性達を十人以上撮影するのを目標とし、痴漢は百件以上やろうと考えていた。女性達の下着姿や、尻の感触を想像するのに夢中の圭太であつたが、終業式が終わって教室へ戻り、成績表を担任教師から渡されると、その表情は一変した。

手渡された成績表は、ページ一面「もつとがんばろう」で埋め尽くされていた上に、教師による批評欄には、「集中力を極端に欠く」という辛辣なコメントが書き込まれていた。

これに怒り狂った圭太は、担任教師に、このような成績をつけるのは全く不当であると抗議し、さらに、批評欄のコメントの変更を要

求したが、まともに取り合ってはもらえなかった。
放課後、職員室に行ってもう一度抗議したが、やはり聞き入れられなかった。

夏休みの開始に胸躍らせて校門を出て行く生徒達の中で、圭太は一人浮かない表情をしていた。

家庭教師の授業を拒み続けた三ヶ月あまりの中で、机に向かって勉強をした日は一日もなかったが、だからといって、成績がこれほど下がるとは思っていなかった。この成績表を両親に見せれば、せつかく貸し与えられた高級マンションも、勉強には何の効果もないとして、解約されてしまうかもしれない。毎月三十万円の小遣いも、減らされてしまうかもしれない。

「圭太君、成績表見せてよ！」

クラスメイト達が近寄ってきた。この成績表を見られれば、いつもの理屈もさすがに通じないだろう。

圭太は何も言わずに、走って逃げ出した。

駆け足でマンションへ戻ると、オートロックの入り口の前で、夏風邪で寝込んでいるはずの芳樹が立っていた。

圭太がかねて疑っていた通り、芳樹は肌つやも良く、健康そのものといった感じで、Ｔシャツとハーフパンツで巨体を包み、どこかスツキリした顔をして、圭太を待ち構えていた。

第四話：芳樹の秘密アルバム

芳樹は右手に青い表紙のアルバムを持ちながら、息を切らしている圭太に話し掛けた。

「久しぶり。何で走ってんの？」

圭太はそれには答えずに、芳樹に問い返した。

「風邪じゃなかったの？何で外にいの？」

芳樹は左手でポケットからハンカチを取り出すと、額の汗を拭い、今度は右手でアルバムを圭太の顔前に突き出した。

「これを見てもらおうと思ってさ」

アルバムは大学ノートほどのサイズで、写真が大量に収められているらしく、大きく膨らんでいた。

表紙にはボールペンで「秘密アルバム」と書かれていた。

芳樹はアルバムを圭太に渡すと、中身を通りすがりの大人達に見られないようにするためだろうか、ハンカチを両手で広げて、アルバムの周囲を囲った。

そして、「早く開けてみるよ」と促した。

圭太はアルバムの表紙をめくった。

一ページに三枚ずつ貼られた写真には、見慣れぬ制服を着た女子高生達が写っていた。

紺色のミニスカートを履き、白いワイシャツに紺と白の縞模様のネクタイを締めた彼女達は、マイクを握って歌を歌っている様子で

カラオケボックスで撮影されたのだろう。中にはカメラ目線で写っている少女もいた。

彼女達は全部で四名いるようだったが、気になるのは、常に彼女達の真ん中に、マイクを握った芳樹が写っていることだった。

写真からは、彼ら五人がただならぬ関係であることが伝わってきた。圭太は心中穏やかでなかったが、それは顔に出さずに、

「これが何なの？」

と芳樹に聞いた。

芳樹は、圭太の質問には答えずに、
「もつと先のページを見てみるよ」と促した。

圭太は言われるまま、先のページへと急いだ。ページがめくられるたびに、女子高生達のネクタイはゆるみ、ワイシャツははだけていった。そして、いつしかマイクはほったらかしになり、芳樹とじゃれあう方に夢中になっていった。

ページがさらに進むと、彼女達の胸を触っている芳樹の写真が現れ、他には、芳樹の手が、彼女達の太ももに伸びている写真もあった。そして、彼女達が上半身裸になってしまうと、急に場面が変わり、別のカラオケボックスで、また別の女子高生達と写っている芳樹の写真が現れた。

圭太は写真から目を放した。

芳樹はつまり、学校を休んで女子高生達とカラオケ三昧の日々を送ってきたというわけだ。

それにしても衝撃的だったのは、芳樹が何のためらいもなく、少女達を裸にし、そしてこれまた何のためらいもなく、彼女達の体に触っていたことである。

これまで、圭太も数多くの女性達に声をかけては、トイレに連れ込むなどしてビデオ撮影に励んできたが、相手の服を脱がして裸にするようなことはなく、せいぜいスカートをめくるぐらいだった。ましてや、直接相手の体に触れる 例えば、胸を揉む ことなど一度もしたことはなかった。圭太がしてきたことは、文字通りのビデオ撮影に過ぎなかったのである。

女性の体を触るなどというのは、大人だけがするともない行為であり、もしも自分が触るのであれば、自転車で追い抜きざまに不意打ちの痴漢行為をするぐらいしか方法はないと思っていた。

呆然とする圭太を見て、芳樹はハンカチでアルバムを隠しながら、

「見終わっただなら返せよ」

と言った。

圭太は青ざめた表情で、アルバムを芳樹に渡した。

芳樹は「秘密アルバム」を大事そうに抱えると、立ち尽くす圭太には何も言わずに帰っていった。

夏本番の日差しが照りつけ、セミがけたたましく鳴いていた。

第五話：徐々にエスカレートしてください

その夜。

空には満月が浮かび、圭太のマンションを天空から照らしている。しかし、圭太に月を眺める余裕はなかった。芳樹に写真を見せられてから九時間が経っていたが、それでも、体中に湧いた興奮は少しも収まっていなかった。気を紛らわそうと、テレビゲームをしたり、檜風呂で体を流したりしたが、何をしていても、ひつこくまとわりつく夏の蚊のごとく、写真に写っていた女子高生達の姿が、頭から離れなかった。特に、芳樹が彼女達の胸を触っていた光景は、拡大映像となつて頭の中で繰り返し上映された。

もはや何も手がつけられなくなった圭太は、PC室の棚から、今までに自作したDVD全てを取り出すと、グシャグシャにしたまま両手でそれらを抱え、リビングルームのテーブルの上にぶちまけた。ワイドテレビのスイッチを入れてソファに座り、DVDを片っ端から見直した。大きな画面には、苦勞して収集した女性達が映っている。高画質の高級ビデオカメラで撮影しただけあつて、彼女達の笑顔や、髪の毛一本に至るまで、まるで映画のワンシーンのように鮮やかに撮れている。そして、彼女達の体に圭太の手が伸びていき、スカートをめくつたり、ズボンを下ろしたりしている。その時に、彼女達の下着が一瞬見えたりして、そこで興奮するわけだが、今日はそんなシーンを見ても、圭太はイライラするだけだった。いつもならお気に入りのはずの、女子高生のスカートをめくるシーンでも、圭太は早送りボタンを押し続けた。

思ひ出すのは、芳樹に見せられた写真ばかりであつた。

プルプル……

テーブルの上で、電話が鳴った。圭太はリモコンでいつものように、テレビのボリウムを下げてから受話器を取った。

「もしもし、圭太だけど」

「お母さんだけど、今日、成績表をもらったでしょう？今からウチに来て、見せてくれる？」

「今は気が乗らない」

そっけない圭太の返事に、母は困惑しているようだ。

「お父さんも成績表を見たいって行ってるけど……」

「そんなに見たいわけ？」

圭太の声に、怒気が混じってきた。

「そんなに見たいなら、こっちに来ればいいじゃない。オートロツクの前に置いとくから、勝手に持っていくなよ」

圭太の横柄な言葉に、母も少し声を荒げる。

「何なのよ、その言い草は……」

「俺の成績は下がったよ。お前らの子育てが原因だよ。お前らは学歴にこだわり過ぎなんだよ。今はもう、学歴は関係ない時代なんだよ。お前らはそんな常識さえ知らないんだろうけどな。俺の成績をこんなに下げやがって、少しは反省しろ!!」

突如、壁が震えるような大声で圭太は怒鳴り始めた。

「お前達は反省しろ！！俺に謝罪しろ！！」

息子の突然の言葉に、電話の向こうの母は、混乱して、言葉が見つからないようだった。

「何とか言えよ！！黙りやがって！！俺の言っていることにちゃんと答える！！」

圭太は容赦なく母を怒鳴りつけると、受話器を思い切り床に叩きつけた。受話器は音を立てて勢い良く跳ね上がったから、床に転がった。そして転がった受話器に向かって、圭太はなおも怒鳴り続けた。

「反省しろ！！謝罪しろ！！反省しろ！！謝罪しろ！！」

母は完全に黙ってしまった。

「反省しろ！！謝罪しろ！！反省しろ！！謝罪しろ！！」

圭太は受話器を拾い上げると、口のそばに当ててもう一度、

「反省しろ！！謝罪しろ！！」

と、怒鳴りつけて電話を切った。

母は何も言い返せずに、無言だった。

外では、リーン、リーンと鈴虫が鳴いている。

圭太は、部屋中の、ありとあらゆる物への八つ当たりを始めた。

電話機を蹴り飛ばし、二度と母から電話がかかってこぬよう、回線をはさみでぶった切った。テレビのリモコンを壁に投げつけ、はね返ってきたところを、今度は足でサッカーボールのように蹴り飛ばした。テーブルをひっくり返すと、床に散らばったDVD達を、足で踏み潰した。テレビ画面に映っている女子高生の映像に向かって、「うるせえー！！うるせえー！！うるせえー！！」と怒鳴り散らした。部屋はマンションごとひっくり返されたように荒れ果てた。圭太はタバコに火をつけると、床に腰を落とし、仏頂面で、なおも画面に映り続ける女子高生の映像を見つめた。

淡い茶髪にキリツとした目つきが印象的な少女だ。第二ボタンまで開けた白いワイシャツに、赤いネクタイを緩く締めている。今まで

撮影した少女の中では、トップクラスの美人と言っている。

「こんな綺麗な人の体を自由に触れたら……あの芳樹の写真のように」

汗をかくほど暴れまわった圭太の心に、どす黒い欲望が湧いてくる。古い皮を脱ぎ捨てて脱皮する蛇のごとく、怒りの感情から、女性達への欲望がずるずると這い出てきた。

興奮して呼吸が速いのか、タバコの火はあっという間に根元まで来てしまった。引っくり返っていた灰皿を元に戻し、すっかり短くなったタバコを擦り付ける。そして、休むことなく二本目を口にくわえ、ライターで火をつける。

まだ幼い左右の肺に、大量のタバコの煙が吸い込まれては、肺胞の隅々まで行き渡った後、外へと吐き出されていく。

町ゆく女性達と仲良くなつて、どこかへ連れ込むのは簡単だ。声を多くすればいい。よほどめぐり合わせが悪くない限り、ついてくる女性はずるずる現れる。だが、難しいのはそこからだ。女性達がついて来るのは、自分が特別な美少年だからではない。女性達は、たまには子供の相手でもしてやるかと思っただけなのだ。彼女達は顔は笑っているが、心の中では本命の大人の男の彼氏のことを考えていて、自分のことなど、はなから対象外なのだ。綺麗な私が、この小さな醜い子供の為に、優しいお姉さんを演じてやっている、ということなのだ。スカートめくりぐらいは笑って許しても、それ以上のことを望めば、大人の大きなお姉さん達は、たちまち怒りを露にして、自分のことなど蹴飛ばして去っていくだろう。

芳樹はどうやってあそこまで、女子高生達と仲良くなったのか。なぜ、あれだけ体中を触っても、笑って許されていたのか。いや、許すも何も、女子高生達の方から、あの太った醜い子豚に進んでじゃれ付けていたではないか。金でも渡したのか。それとも、あの子豚には、女性を惹きつける魅力があるのか。だとするならば、自分はその豚ほどの魅力もない人間なのか。自分はどうすれば、あのように女性の体に触れることが出来るのか。

二本目のタバコも、あっという間に吸い終わった。

圭太はつぶやいた。

「睡眠薬を買おう」

すぐにPC室へと移る。電気は点けず、真っ暗な部屋の中で、パソコンの起動ボタンを押す。

暗闇の中で画面が輝き、全身に欲望の蛇が巻きついた圭太を照らす。

「睡眠薬を買った」

パソコンに「確実に撮影」と入力し、検索する。

検索結果が表示された。

一覧の一番上のサイト名に矢印を合わせ、クリックをする。

『確実に撮影』

ようこそ。我がサイトへ。

仲間がいてくれて嬉しいよ。

大人も子供も私は区別しない。

皆、存分に、性欲を満足させるべきだ。

「入り口」

圭太は「入り口」をクリックする。

三つの選択肢が表示された。

「撮影方法」「撮影手段」「撮影技術」

「撮影手段」に矢印を合わせ、クリックする。

「老人」「大人」「子人」

「子人」をクリックする。

「金銭」「合意」「強制」

「強制」をクリックする。

鈴虫の声はいつの間にか止み、時計は十二時を過ぎていた。

「スタンガン」「手錠」「睡眠薬」

「この前と全て同じだ」

赤い画面、白い文字、そして三つの物騒な選択肢。何もかもが、以前来た時と同じだった。

「睡眠薬を買うんだ」

圭太は矢印を「睡眠薬」に合わせ、クリックをした。

画面が切り替わった。

『買い物力ゴ』

ただいま「睡眠薬」が一箱入っています。
現在のお買い上げ金額は、一万五千円です。

あなたの氏名・郵便番号、住所を入力してください。

「野田圭太」「XHY-GIMS」「T県T市……」

圭太は氏名・郵便番号、住所を入力した。

画面下側に「注文確定」の表示がある。

「注文確定」をクリックする。これで画面が切り替わり、「ご注文ありがとうございます」とでも表示されるだろう。

「届くのはいつぐらいになるのかな？」

画面はなかなか切り替わらない。

「なるべく早く来るといいな」

まだ画面は切り替わらない。

「何だよ。随分時間がかかるな」

その時、ようやく画面が切り替わった。現れた画面には、赤い背景に、白い文字が書いてあった。

！！

「なんだ。これは？」

「注文不可」

「徐々にエスカレートしてください」

「どういうことだ？なぜ注文できない？」

「注文不可」

「徐々にエスカレートしてください」

白い文字が無表情に並んでいる。

意味が分からない。ひとまず、この画面から抜け出そうと、「戻る」の表示を探してみる。

だが、画面のどこにも「戻る」はない。赤い画面が広がっているだけだ。

「なんで注文できないんだよ？」

その時、何の説明もなく、画面は自動的に切り替わった。新しく現れた画面には、これまでとは違い、選択肢が一つだけ表示されていた。

「スタンガン」

第六話：標的探し

翌朝。

夏休み初日の快晴の空は、これから始まる四十日間への期待のせい
か、いつもより晴れやかに見える。こんな空を眺めていると、昨晚
荒れ狂った圭太の心も、少しばかり落ち着きを取り戻す。

ベランダで、大人気取りでコーヒーマシーンで朝の空気を楽しみながら、
圭太は昨晚のことを思い出した。

『買い物力ゴ』

ただいま「スタンガン」が一丁入っています。

現在のお買い上げ金額は、一万五千円です。

あなたの氏名・郵便番号、住所を入力してください。

「野田圭太」「XHY・GIMS」「T県T市……」

「注文確定」

「ご注文ありがとうございます。商品は一週間後に到着いたします」

「まずはスタンガンから始めろというわけか」

数個の黒点となって青空を汚すカラス達を見つめながら、圭太はつ
ぶやく。

「スタンガンを手に入れたとして、どうやって女達に使うのか？」
スタンガンは沢山の種類がある。種類によって威力には大きな差が
ある。威力はボルトで示されるようだが、サイトにはその表示が全

くなかったため、自分が買ったスタンガンが、どの程度の威力なのかさっぱり分らない。女性の体を気の済むまで触る為に使うのだから、相手を確実に失神させる威力がなくては困る。少しひるむ程度の威力しかないのなら、逃げられてしまつて、警察に通報され、補導されるという大恥をかくことになる。そうなれば、クラスメイト達にどれだけの嘲笑を浴びるだろうか。頭が良く、エリート校へ進むはずの圭太は、実はこんなにいやらしいケダモノだったと笑われるだろう。将来を約束されていた大金持ちの息子が、大ボ力をやらかして人生を棒に振つたと、大笑いされるだろう。そして、何十年経つた後も、クラスメイト達は人に会う度に、「昔、こんな間抜けな奴がいて……」と自分のことを話し続けるだろう。そして話を聞かされた相手が、さらに他の人間達に言いふらしていくのだ。

だからこそ、警察の厄介になることだけは避けなくてはならない。その為には、果たしてスタンガンというアイテムは有効なのだろうか。本当に、自分の欲望に貢献してくれるのだろうか。

「今ゴチャゴチャ考えても仕方がない。とにかく、めばしい女を見つけておこう」

コーヒーを飲み干すと、圭太は撮影バッグを背負い、部屋を出た。ベランダから見える青空には、まだカラスが飛んでいる。かなり高いところを飛んでいるのだろう。随分小さく見える。

外へ出ると、自転車に乗った同世代の子供達が、何度もすれ違う。

夏休みということで、みんな早速遊び始めたようだ。

圭太は自転車で最寄の私立大学へと向かった。この大学はどの学部も偏差値は低い、敷地が広く、校舎のデザインだけは立派なので遠目から見ると、近代的な一ぱしの一流大学に見える。ひとまず女性探しをするにはここが丁度いい。

大学の正門から五十メートルほど離れたところに自転車を置き、ハンカチで汗を丁寧に拭い、香水を首筋にふりかけ、持参した手鏡で髪型を入念に直すと、圭太は女子生徒達の物色を始めた。夏休みと

いうことで数は少ないが、大学生達がちらほらと前を通り過ぎて、構内へと入っていく。蒸し暑いので、自動販売機で缶ジュースを買って喉をうるおし、女子生徒がやってくると、逃さずに目で追う。女子大生ともなると、容姿の良い子はほとんどの場合、隣に男を連れているようだ。男女二人で歩いていたり、女一人に男が二人、女二人に男が一人と、その組み合わせはいろいろあるようだ。平均以上の容姿を持つ子達は、いずれも男を側に連れている。とても話し掛けられる雰囲気ではない。

圭太にしてみれば、大学生の大人の男達は皆、凶暴な大男に見えるし、茶髪やら金髪やら、カラフルな頭をしたこの大男達は、どれもこれもチンピラとしか思えない。女子大生達に声をかければ、彼らはたちまち絡んできて、そして、自分はどこかへ連れて行かれ、リオンチに遭うだろう。運が悪ければ殺されるかもしれない。そんな時の為に、圭太はポケットに刃渡り九センチの飛び出し式のナイフを忍ばせている。飛び出し式といっても、ボタンを押すと自動的に刃が飛び出てくるタイプは法に触れるので、ボタンを押しながら、手を前方へ強く振ると、そこでやっと刃が飛び出る仕掛けになっている。素早く刃を出せるように、もちろん、十分な練習はしてあるが、これを大っぴらに使えば、警察に補導され、やはりクラスメイト達に大恥をかくことになる。女性の体に触れぬまま、こんなチンピラ達を刺して補導されるのも、馬鹿馬鹿しかった。

「無理だな。ここは」

圭太ぐらいの少年には、やはり高校生の子達が合つものかもしれない。圭太は自転車に乗ると、ここから最寄のN高校へ向かった。

「バッチこーい！」

真っ白なユニフォームを着た高校球児達の爽やかな声が聞こえる。打撃練習が始まり、金属バットの甲高い音が真夏の空に響き、白球が美しい弧を描いて飛んでいく。

N高校のグラウンドを、圭太は網越しに見つめていた。グラウンドの大

半は野球部が占有しているようだ。圭太の目当ての女子高生達
テニス部や、バレー部の子達　は遠くの、校舎側のコートで練習
していて、近くで見ることが出来ない。目の前で見れるのは、汗ま
みれ、土まみれの高校球児達だけだ。圭太は彼らの練習を見るふり
をして、遠くの女子高生達をじつと眺める。遠目から見ても、彼女
達の中に、とびきりの美人が何人かいるのが分かる。テニス部に二
人、バレー部に三人ほどだろうか。この五人に何とか話しかけたい
が、その為には門をくぐって学校内へ入らなければならない。だが
そうすれば、たちまち教師達に捕らえられ、放り出されるだろう。
ここはやはり、練習が終わって、彼女達が門から出てくるのを待つ
しかない。

「何時になれば終わるんだ？」

普段なら、女子高生達の下校時間は午後四時から七時あたりと決ま
っているから、その時間を狙って学校周辺で待っていればいい。し
かし、夏休み中だと、部活の練習時間によって、いろいろな時間帯
にバラバラに下校してくるから、確実に女子高生を捕まえるなら、
それこそ一日中外で待っていなければならない。

圭太は二本目のジュースを口にしていたが、そのせいか、バットを
握った球児達は、時折、圭太のジュースを恨めしそうに見つめてく
る。この視線の中、そしてこの蒸し暑い中、何時間もここで待つ気
にはなれなかった。

圭太は、球児達に見せびらかすように、大げさにジュースを飲み干
すと、自転車を走らせた。

シャツから出た両腕を、じりじりと日差しが焦がしてくる。太陽に
向かって「もうやめてくれ」と言いたくなる蒸し暑さだ。圭太は次
のK高校へ向けて、国道沿いの歩道を走っていた。K高校へ着くに
は、あと十分ほど自転車をこがねばならない。部活帰りのK高校の
女子生徒達が前から来てくれればありがたいのだが、誰も来ない。
みんな、部活中なのだろうか。暑くてしかたがないが、やはり、こ

のまま自転車をこぎ続けて、こちらから向かうしかない。舗装されたのアスファルトが美しい国道には、大型トラックがけたたましく行き交っている。ガードレールがあるとはいえ、すぐ側を鉄のモンスターが轟音を立てて走り去っていく迫力は、なかなかのものだ。子供の圭太には無縁の存在だったので、今まで気付かなかったが、国道沿いには多数のガソリンスタンドがあるではないか。ふと、スタンドの女性店員達を見してみる。猛暑の中、つなぎを着ている女性店員達の中には、意外と美人が多いことに気がついた。

「別に学校にこだわることはないんだよな」

このままK高校へ行き、いつ出てくるかも分からない女子高生達を待つよりは、ここは積極的に、市内にある、店という店の女性店員達を見てみようと考えた。とりあえず、圭太は居並ぶガソリンスタンドの女性店員達を一通りチェックして、二名を記憶すると、市内のコンビニを回り始めた。

コンビニを見つけると、自転車を止め、ガラス越しに店内をのぞきめぼしい女性店員がいなかチェックする。例えいなくても、商品棚に隠れて見えないだけでも知れないので、とりあえず店に入る。

まず、入り口付近にある雑誌コーナーに行き、そこで雑誌を読むふりをしてカウンターに目を凝らす。カウンターに女性店員がいない場合は、店を隅々まで歩き、死角のどこかに隠れていないかチェックする。夏休みのせいだろうか、平日の昼間でも若い女性店員が多い。市内中のコンビニを回って、五名の女性店員に話し掛け、今後の布石とした。

次はファーストフード店を見回った。カウンターの女性店員をチェックしては、何も買わずに帰っていく。四名を記憶しておいた。続いて、ファミレスを回ってみる。店内に入るとドリンクバーを注文し、後はウェイトレス達を目で追う。このやり方だと、店に入るたびにドリンクバーの料金が掛かるわけだが、圭太の豊富な小遣いをもってすれば、どうということはない。スタンガン到着までの下準備として、ここでは五名のウェイトレスに声をかけた。

午後七時、日の長い夏とはいえ、辺りはすっかり暗くなった。

市内を駆け回って疲労がピークに達した圭太は、巡回はもう止めてマンションに戻ることにした。圭太のマンションから三百メートルほどの所に、「Y」という名の喫茶店があるが、帰宅途中に、丁度その「Y」の前を通った。この店の存在は以前から知っていたが、レンガ造りのしゃれた店で、大人でないと入りづらい雰囲気だったから、遠い別世界のお店として、気に止めてはいなかった。しかし、一日中女性達を探し回った余韻もあって、綺麗な女性はいないかと、いつになく店内を覗いてみた。自転車走りながら覗いたので、ほんの一瞬しか見えなかったが、圭太は見逃さなかった。紅茶色の照明に照らされた店内に、客の注文を書き留めている、とびきり美人のウェイトレスがいた。急遽、夕食はここで食べることにして、店に駆け込んだ。

「Y」は席数二十ほどの小さな店で、店内には静かに「メリーさんの羊」が流れていたが、これはカウンターの横に置かれている、本物の蓄音機が奏でていた。年代物のようで音質は悪いが、それがかえって古風な雰囲気演出している。この店の主は、なかなかこだわりの強い人物のようだ。ヒゲ面の年配の男がカウンターでカップを洗っているが、彼が店長だろうか。店は空いていて、スーツを着たビジネスマン風の客が三人いるだけだ。

「さっき見た美人さんはどこだ？」

「何名ですか？」

仏頂面のウェイトレスが、突然聞いてきた。さっき見たのとは別のウェイトレスだ。

年齢は三十台半ばほどだろうか、黒髪を後頭部できつく縛っている。純白のワイシャツに真っ黒のネクタイを締め、真っ黒のスポンを履き、腰からは、これまた真っ黒のエプロンをしている。店の雰囲気合ったしゃれたユニフォームだと思うが、どうにも態度が悪い。

圭太は「一人です」と答えたが、ウエイトレスは返事はせず、無言のまま、彼を入り口に一番近い席に座らせた。「カプチーノと、たらこスパティ」と注文をしたが、やはり返事はなく、一度もこちらを見ないまま、背中を向けて去っていった。料理を持ってくる時もまるで汚いドブネズミに、仕方なく餌をくれてやっているといった感じで、放り投げるようにテーブルに置いていった。随分とあかさまな接客態度だが、このウエイトレスが、なぜこのような態度をとるのか、圭太にはよく分かっていた。

大金持ちの資産家の息子として生まれた圭太は、幼い頃より、父に連れられて高級レストランに度々足を運んでいた。野菜サラダ一つで何千円もぶん取られる店だ。そんな高級店にも、Ｔシャツ姿の若い男性客や、子供の客が紛れ込んでいることがある。「開店以来、お客様にぬるいコーヒーなど一度もお出したことはありません」と、圭太の父に向かってにこやかに話していたウエイトレス達は、彼らの前では一転して無愛想になり、注文を聞く時も終始無言で、返事は一切しようとしなかった。そして、さっさと出て行けとばかりにそつぽを向いて、彼らの前に料理を放り投げていくのである。お前達には接客の悪い店だと、いくら思われても構わない。二度と来たくないと思ってくれて構わない。お前達が来なくなつて、お金持ちの上客さえ相手にしていれば、ウチの店はちゃんと繁盛するのだから。そんな態度だった。そして彼女達は、圭太の父の前に来ると、またにつこりと笑顔を見せるのだ。そして、そんな彼女達に向かって圭太の父は、「さすが、一流店はマナーがしっかりしているね」と褒めちぎるのである。そんな光景を見てきた圭太であつたから、こういう気取った店の店員達の人となりは分かつていた。この仏頂面のウエイトレスは、ブランド物のスーツで身を固めたビジネスマンや、流行の服を身にまとった美男美女のカップルぐらいしか、自分の店にふさわしい客と認めていないのだ。こんな小汚い子供の客に入られたら、自分の店の品格が落ちるとでも思っているのだろう。カウンターの前で、圭太を視界に入れぬようにわざとそつぽを向い

ているウェイトレスに向かつて、ちゃんと彼女に聞こえるように、圭太は大きな声で独り言を言った。

「いいお店だな。お前みたいな馬鹿がいなければ」

はつきりと聞こえたのだろう。仏頂面のウェイトレスは、顔は動かさずに、目だけを圭太の方へ向けて、睨み付けてくる。

「美人のウェイトレスはどこへ消えたんだ？彼女を見たくて来た訳であつて、馬鹿のお前を見に来たんじゃないんだ」

圭太はまくし立てる。

「カウンターの前に馬鹿が立ってるな。目が腐る」

怒りに耐えかねたのか、仏頂面のウェイトレスは、圭太を睨み付けてから、カウンターの奥のキッチンへと消えていった。キッチンに入る前に、振り返って、もう一度圭太を睨み付けるといふ念の入れようだった。

仏頂面が奥へ消えると、代わりに、あのとびきり美人のウェイトレスが出てきた。彼女もまた、純白のワイシャツに真っ黒なネクタイとズボンという姿で、腰からはやはり、真っ黒なエプロンをしている。こうして真近で見ると、美人というよりは可愛いという表現が似合う女性だ。肩に毛先が少し触れる程度の長さで、後ろへ軽く跳ね上げられた黒髪が、彼女の社交的で明るい性格を表しているようだった。丸顔で、黒目が大きく、幼さを含んだ瞳が輝いている。その目つきもまた、彼女が明るく、人なつこい性格であることを示していた。

そしてその第一印象の通り、彼女は圭太を見るなり、夏の日差しのような明るい笑顔で、積極的に話し掛けて来た。

「いらつしゃいませ！この店は初めて？料理の味はどう？気に入ってくれた？」

大人の客達よりもまず、真っ先に圭太の所へ来てくれた事が嬉しかった。

「本物の蓄音機が置いてあるなんておしゃれですね。しかも、エジソン式の筒型レコードを使っている」

「お、詳しいんだね。私はあんな筒型のレコードがあるなんて、ここへ来るまで知らなかったよ。店長のこだわりなんだってさ！」
そう言っただけは、カウンターにいる、例のひげ面の年配の男を指差した。やはり、彼が店長だったようだ。

彼女の笑顔には、大きな瞳を無理に開けて、自分の瞳の大きさを誇示するような不自然さがない。

相手をリラックスさせる、健康的で自然な笑顔だった。圭太はまず彼女を気に入ってしまった。

「エジソンが創立したのはゼネラルエレクトリック社です。父に教わりました」

自然と会話が弾んだ。

彼女は、圭太が訪れようとして途中で止めた、あのK高校の一年生だという。バイトを始めてまだ一ヶ月らしい。

名前は鈴木舞、十六歳だ。

圭太はこの店に通うことに決めた。

スタンガン到着まで、あと一週間。

第七話：スタンガンの到着

愛しの舞へ会うため、圭太の「Y」詣でが始まった。

今までの夏休みではお昼過ぎに起床するのが常だったが、今年は一転して、毎朝九時半にしっかりと目を覚ます。「Y」の開店時間、十一時に間に合うようにするためだ。夏の夜は蒸し暑く、一晩で結構な汗をかくから、そのまま店に行ってしまうと、舞に汗臭いと思われるかもしれない。寝室のベッドから起き上がると、圭太がまず最初に向かうのは檜風呂だ。シャワーで寝汗を流し、舞にいい匂いだねと言ってもらえるように、髪の毛はハーブの香りつきシャンプーで、体は最近手に入れた抹茶石鹸なる代物で洗い上げる。風呂から出れば歯を磨き、洗面台の三面鏡とにらめっこして、スポーツ刈りを熱心に整える。

それから寝室に戻ると、クローゼットからお気に入りのTシャツとハーフパンツを取り出し、壁に据えつけられた大型の全身鏡で見栄えを確認する。今日は青いTシャツに白のハーフパンツを選んだ。そして、撮影用バッグを背負って意気揚揚と玄関を出る。それがここ数日の圭太の朝の風景だ。店へ向かう間も、自転車はなるべくゆっくりこいで汗をかかないようにする、という念の入れようだった。

十一時きっかりに「Y」のドアを開けて店に入る。年代物の蓄音機が、いつものように「メリーさんの羊」を奏でている。もうすつかりメロディーを覚えてしまった。まだ客は誰もいない。今日も一番乗りだ。ところがどうしたことか、笑顔で迎えてくれるはずの舞がない。

首を振って舞の姿を探す圭太に、仏頂面のウェイトレスが「何名ですか？」と聞いてくる。もう何日も圭太は一人でやってきているのだから、そろそろ圭太を見るなり一名とすぐに理解し、笑顔で座席に案内してくれてもいい頃だが、彼女は他人行儀をやめるつもりは

少しもないらしい。圭太も負けじとばかりに「一人です」と他人行儀で答える。彼女の案内は無視してつかつかと歩き、勝手に一番奥のテーブルについた。

「店長、舞さんは休みなんですか？」

「いや、寝坊だよ」

そっけない返事だが、ヒゲ面の店長は圭太を常連客と認めてくれたようだ。言葉に親しみがこもっている。

「彼女が来る前に、腹ごしらえしたらどうだい」

「そうですね。今日はモカブレンドと、ジャムトーストがいいな」

「すぐに準備するよ。コーヒーは、二杯目以降は半額だからね」

店長はキッチンへと消えていく。

おかげで仏頂面のウェイトレスと二人きりになった。一番奥の席に座っているとはいえ狭い店だから、カウンターの前に立つ彼女との距離は三メートルほどしかない。クーラーがかかっているが、両者の間にはそれとはまた別の冷ややかな空気が流れる。

彼女も二人きりになるのは嫌なのだろう。圭太を視界に入れないようにドアの方を向いて、客がこないか気にするそぶりをしている。

それでもお互いに意識しているから、自然と両者の目は合ってしまう。視線が合うと「先にそらした方が負け」という雰囲気になり、お互い張り合ってますます睨み合うようになる。

「もう何日も、俺は一番乗りでこの店に通ってるんだ。そろそろ俺を客と認めるよ」

この数日間、圭太が舞や店長と談笑していても、彼女は決して話に加わろうとはしなかった。楽しく話す三人を尻目に、一人そっぽを向いて突っ立っては、いつもの仏頂面である。しゃれた喫茶店で働く自分のことをよほどエリートと考えているのだろうか。選ばれし者だけが住める聖なる世界に、こんな小汚い餓鬼など入れるものか、といったようすである。

「こんなシカトを何日も続けるのはくだらないからもうやめようとか、そういう時間の経過に伴う思考の変化はないんだろっな。こう

いう馬鹿に時間の概念はない。五年でも十年でも、飽きることなく嫌がらせをしてくるだろう。芳樹と同じタイプだ」

連日店に通い、舞や店長との会話を繰り返すことで、自然とこのウایتレスの情報も入ってくる。蓮沼千恵子^{はすみまちえこ}という名前で、三十三歳、独身だという。彼氏がいるかどうかは分からないが、そこそこ男前の知り合いが何人かいるようだと言長から聞いた。

千恵子のはつきりと圭太を睨みつけてくる。これほどあからさまに睨みつけられ、自分が相手を嫌っていることが当然、相手に伝わってしまう。そうなれば性格の悪い女だと思われるってしまう。しかし、千恵子は圭太に関してはそのでかまわないうだ。いい女と思われないという感情が、圭太に対しては一切湧かない。つまり、圭太のことを百パーセント見下しているのである。

「こういう店には、こういう店員が必ず一人はいるからな」

圭太は右手をポケットに入れて、今日も忍ばせてある飛び出し式のナイフを握る。

「肋骨のすき間を通って、このナイフがためーの心臓を貫くぞ？」
刃の全長は九センチ、幅は一センチ半ほどの小さなナイフだから、がむしゃらに全身をメッタ刺しにするか、的確に心臓を貫くかしな
いと、致命傷を負わせることはできないだろう。そんな物騒なことを考えている圭太に、店長がコーヒーとトーストを持って来てくれた。

カップを手にとってモカブレンドを一口すすってみる。やはりこの店長、腕は確かなようだ。彼の入れたコーヒーは苦味、酸味共に絶妙の一品で、この冷え切った空気まで暖めてくれる。

その時、店のドアが開いた。舞が入ってきた。髪はきれいにとかさ
れているが、寝坊して慌てたのか、服装はＴシャツにジャージのズボンというラフな格好だ。

「おはようございま〜す！遅れてすみません！」

待望の舞の登場に、圭太はご機嫌だ。

「舞さん、こんにちは！」

「おゝ圭太君、もう来てたんだ。私も早く着替えなきゃ！」

舞は笑顔でカウンターの奥へと消えていく。

「着替えなきゃ！」という舞のセリフがきっかけとなって、圭太の頭の中は舞の着替え姿でいっぱいになった。すると、舞と話するときの明るい顔が気に入らないのか、それとも舞へのいやらしい視線が気に入らないのか、千恵子は目つきをいつそう厳しくして、圭太を睨みつけてくる。

「しつこいな。お前なんか、このナイフを使えば今すぐにでも殺せるんだぞ？」

圭太は再びナイフに手をかける。実際のところ、大人の女性にこれだけはつきりと見下した態度をとられるのだから、圭太はショックを感じずにはいられなかった。自分が他の大人の客と比べてみずばらしいことは自覚していたし、自分がとりたてて美少年でないことも分かっていたからなおさらだった。そのショックを隠すために、千恵子を怒らせる行動をわざと取ったり、ナイフを触ったりしているのである。殺してやると心の中で物騒なことを言ってみても、早く舞にそばに来てほしいというのが本音だった。

その舞が、店のユニフォームの四点セット　純白のワイシャツに、対照的な真っ黒なネクタイ、ズボン、エプロン　に着替えてやってきた。

「圭太君はしつかりしてるね。毎日ちゃんと十一時に来てさ」

舞が瞳を輝かせて話し掛けてくる。何気ない雑談のときでさえ、何かとても面白い話をしているかのように瞳を輝かせてしまう。それが、舞が自然に身に付けている社交術だった。舞が来てくれて心強くなった圭太は、千恵子のことは忘れて早速、舞の胸に目をやる。

「今日は青のブラジャーか」

ワイシャツから舞の下着が透けて見えている。透けているのを知ってか知らずか、黒やらピンクやらグリーンやら、舞はいつもカラフルなものを付けてくる。子供の圭太には刺激が強い。しかし、芳樹の写真を思い出すと、透けた下着を眺めるぐらいで満足してはいけ

ないと自分を戒める圭太だった。

「エスプレッソ式は沸騰の蒸気圧を利用してコーヒーを抽出するんです」

「すごいね。どんどんコーヒーに詳しくなっていくね」

「サイフォン式はスコットランド人の発明ですよ。これは空気圧を利用してます」

舞との会話が弾んですっかり機嫌が良くなった圭太であったが、それを邪魔するかのように携帯が鳴った。

折りたたみ式の携帯を開いてみると、画面には「豚」と表示されていた。芳樹である。

一瞬で気持ちが沈み、顔が曇る。その変化に気づいて舞が声をかけてくれる。

「どうしたの？嫌な相手からかかってきたのかな？」

「何でもありません。ちょっと、店の外で話してきます」

芳樹からの電話は、それはそれは不快な内容だった。

「もしもし、圭太だけど」

「あゝ、俺、俺、芳樹」

「何の用事？」

「お前に聞きたいことがあってさ」

まるで格下の相手に接するような口調である。

そしてその口調のまま、意味の分からないことを聞いてきた。

「カップラーメンって、五分間温めなくちゃいけないのもあるよね？」

「……何なんだよ、その質問は」

「だからさ、カップラーメンって、五分間温めなくちゃいけないのもあるよね？」

質問にいたる経緯も説明せずに唐突な質問を繰り返され、圭太の苛立つは募っていった。電話からやかましい音楽が聞こえてくる。カラオケボックスからかけてきているのだろう。

「だからさ、カップラーメンは五分間温めなくちゃいけないのもあるよな？」

「そんなこと知らないよ」

芳樹の声の後ろから、女性の歌声が聞こえてきた。

「俺今女子高生とカラオケに来てるんだ。そしたらカップラーメンは五分間温めるのがあるかどうかって話になったんだ。だけどみんな分からないから、こうしてお前に聞いてるわけ」

圭太は芳樹の意図が分かった。つまり、芳樹は今女子高生達とカラオケで遊んでおり、そこでカップラーメンは五分間温めるものがあるかどうかという他愛のない話になった。そしてそんなことは人に電話して聞くほどのものでないと分かりつつ、自分が女子高生と遊んでいることを知らせるため、圭太に電話をかけてきたのだ。

「なあ、カップラーメンは……」

「知らないよ！」

「怒るなよ」。お前今なにやってんの？ひとり？」

「関係ないだろ！」

芳樹の嫌味に耐えかねて電話を切った。

とぼとぼと店へ戻って座席に座り、残り少なくなったコーヒーをすすする。

「何かあったの？」

元気がなくなつた圭太を心配して、舞が透けた下着を見せつつ聞いてくる。胸元を眺めながら「何でもないです」と答える圭太。小ぶりで形良く膨らんだ舞の胸を眺めていると、少しずつ気持ち落ち着いてくる。冷静に対処していれば、芳樹の嫌がらせ電話に対して色々な反撃ができたことに気が始める。

「舞さんに電話を代わればよかったんだよな。そうすれば、芳樹も俺が女といることを知って悔しがったかもしれない。何でそれに気付かなかったんだ。俺は芳樹のあの豚のような嫌な声を聞くと、冷静さを失ってしまうんだ」

ドアを開けて、スーツ姿の男性客が入ってきた。

「ごめんね。お客さんが来たから」

舞は来店した客の方へかけていった。

「いらつしゃいませ！」と元気にあいさつする舞の後姿を、圭太はあらためてじつくりと眺めた。

舞は身長は百五十八センチで大柄というわけではない。しかし猛練習のかいあって、中学時代はバレエ部のエースとして活躍したらしい。高校へ上がると同時にバレエは辞めてしまったが、今でも筋トレや、夜のジョギングは欠かさないという。その成果だろう、運動している女性特有の精悍な体つきをしている。

「舞さんは俺に心を開いてくれてるよな。でも、舞さんは誰にでもフレンドリーに話すからな」

圭太の言葉通り、舞は初対面の男性客ともすぐに打ち解けて、にこやかに談笑している。男性客に見せる舞の笑顔は、圭太へのものと何ら変りはなかった。やはり、舞にとつて圭太は特別な存在ではないということか。舞が誰にも分け隔てなく放つ無数の笑顔の中の、ほんの一つが圭太に向けられているだけということか。男性客のにやけた顔が癪にさわる。

舞と話せぬのでは意味がない。圭太は「Y」を出ると、女性を求めて市内を巡回し始めた。

声かけが上手くいかなかったため、今日も痴漢を五件ほどやった。日が落ちてから帰宅したが、リビングのソファに腰掛けた時、インターフォンが鳴った。スタンガンの到着である。

第八話：真っ赤なスタンガン

配達員に代金一万五千円を渡すと、圭太はさっそくスタンガンの入った箱をリビングルームに持っていった。

テーブルの上に置き、胸の高鳴りを感じながらじつくりと眺めてみる。真っ赤な箱だ。縦二十五センチ、横二十センチ、厚み五センチほどの大きさで、箱はぴたりと張りついた透明なビニールに覆われている。ビニールには圭太の住所氏名が書かれたシールが貼ってある。せつかく真っ赤な箱なのに、白いシールが邪魔だ。全身真っ赤に染まっただけの姿を見たくて、圭太はビニールをはがした。

「美しい」

表、裏、横、すべて真っ赤だ。無駄な文字や、絵柄がどこにもない。差出人の名前も書かれていない。全身真っ赤の箱の美しさにしばし見とれてしまう。この美しい箱の中に、これから女性達を次々と襲うであろう、スタンガンが入っているのだ。そう思うと圭太の心臓は高鳴り、早くも女性達が失神して倒れこむ姿を想像する。

「とてもきれいな箱だ。傷つけないように大事に開けよう」

圭太は両手をそっと箱の両脇にあてて、フタを静かに持ち上げた。フタは音もなくすっと上に浮き上がる。

「意外と小さいんだな」

開けられた箱の中央には、タバコの箱とほぼ同じ大きさの真っ赤なスタンガンが置かれていた。周囲には純白の綿が敷き詰められている。真っ赤なスタンガンと真っ白な綿のコントラストが美しい。スタンガンの小ささに驚いた圭太であったが、その鮮やかな赤い塗装に目を奪われ、すぐに気に入ってしまった。さっそく手にとってみる。

「けっこう軽いな。電池を入れればもっと重くなるか」

綿に埋もれていた電池を取り出した。普段目にする円筒状の電池ではなく、四角形の箱型電池だ。これも真っ赤だ。電池まで塗装する

とは、「確実に撮影」サイトの管理人は細かいところまで手が込んでいる。スタンガンの底部をスライドさせて、電池をセットする。電池の重みが加わってスタンガンの重量感が増す。翻って本体先端部を見てみると、中央に内向きの電極が二本、その両端に外側へのびる電極が二本、計四本の電極がある。この電極だけは銀色だ。ここから放電されるのだろう。

スタンガンを右手でかく握ってみると、親指にボタンがあたる。これがトリガーだろう。このボタンを押せば、先端部の電極から放電が始まり、目標を打ち倒してくれるはずだ。反対側の人差し指にはスライド式のスイッチがあたる。スイッチ部の上下には白い文字で「最強」「最弱」と書いてある。スイッチを上スライドさせると「最強」、下にスライドさせると「最弱」となる。この文字が意味するのは何なのか。威力が変わるということか。それを確かめるため、圭太はいよいよこのスタンガンの試し撃ちをすることにした。腕を上げて高く構えて、スタンガンになるべく体から離す。人差し指をスライドさせ、まずは「最弱」にスイッチを合わせる。期待と不安を混じえながら、いよいよ親指でトリガーを押す。

パチ……パチ……パチ……

あつけないほど小さな音を出しながら、白く弱々しい閃光が電極から放たれた。

消えかきりそうな夏の線香花火のような頼りない稲光だ。スタンガンの知識のない圭太でも、「最弱」には人を失神させる威力はないことがすぐに分かった。圭太は試しに自分の左の人差し指を閃光に当ててみた。

「少しだけピリツとくるな。こんなじゃ女なんか倒せやしない」「最弱」では触った瞬間、皮膚の表面にわずかに痛みが走るだけだ。これぐらいなら慣れればいくらでも触っていられる。女性にこれを浴びせてみたところで、すこし驚かせる程度だろう。失神させるなど到底不可能だ。

圭太はもう一度腕を高く上げてスタンガンを体から離すと、いよいよ

よ本番の「最強」にスイッチを合わせてトリガーを押した。
バチバチバチバチバチ！！

「うわあ！！」

青白いすさまじい閃光と、想像をはるかに越える轟音に驚いて、圭太は思わずスタンガンを床に落としてしまった。「最強」が放つ閃光は恐ろしく、明るく、激しく、嵐の日に空を一瞬青く染める稲光が、自分の目の前に落ちてきたようだった。このまま手で持っていれば死んでしまうと恐怖を感じ、反射的に手を離してしまった。

「すごい威力だ。これなら女は一発だろう」

「最強」の威力がすさまじいことはわかった。だが気になることがある。これだけの稲光を起こす「最強」を女性に浴びせた場合、相手は死亡するのではないか。

「死なれては困るんだ。警察の世話にはなりたくない」

このスタンガンの威力の目安となるデータがないか、説明書を探してみる。箱の中をのぞいてみると、スタンガンがはめこまれていたその下に、赤いカードが置いてあった。カードには白い文字で何か書いてある。さっそく手にとって見てみる。

「最弱：少ししびれます」

「最強：かなりしびれます」

抽象的であいまいな文章だ。数値を挙げるなりして威力の目安を教えてほしい。しかし、カードにはこの二文しか書いていない。「最強」だとかなりしびれることは、あの稲光を見れば感覚的に理解できる。しかし、具体的にどの程度の威力なのかを知りたいのだ。「最強」だと相手の女性を死なせる可能性があるのではないか。それとも稲光が派手なだけで、人を死なせるような威力はないのか。そのあたりを示す情報がほしいのだ。

「それにしても『最強』と『最弱』とはずいぶん極端な設定だよな。あいだに『中間』とかも設定してくれればいいじゃないか。なんでこんな両極端な設計にするんだ。危なっかしくて下手に使えないじゃないか」

このスタンガンを真っ先に浴びせたい相手として浮かぶのは、舞である。しかし、このスタンガンは舞を死なせる可能性がある。舞に欲情はすれども、それ以上に愛着がある。失神はさせるが致命傷は負わせない、という確認をとってからでないと、舞に向かって使うわけにはいかない。彼女の体を思う存分触りたいが、必要以上のダメージを与えるのは気が引ける。できれば無傷で、ほんの数分間失神してくれればいいのだ。このスタンガンの威力　特に「最強」の威力　を確かめなければならない。

「そのためにはまず、死なれてもかまわない相手に実験をするしかない。しかしその実験で、相手に死なれたらどうする？俺は殺人犯になる。そうなればクラスメイト達に一生笑われることになる。特に芳樹に」

スタンガンについての基礎知識を仕入れるため、圭太はPC室に向かった。

パソコンを起ち上げ、スタンガンの情報を集める。一通り目を通してみる。最近のスタンガンは小型化が進んでいて、タバコの箱大というのはごく標準的な大きさだと分かった。真っ赤なスタンガンの小ささは別に異常でないことが分かり、圭太はホッとした。市販されているスタンガンの中で、威力を二段階に切り替えられるものはないようである。この点では、真っ赤なスタンガンは異色の存在ということになる。さらに情報を集めてみると、極めて重要なポイントにたどりついた。

「スタンガンの効果は、相手に押し付ける時間に左右される」

スタンガンが相手に与えるダメージは、単純に電圧の高さで決まるのではなく、相手に電極部を押し付けてから、そこで何秒間トリガーを押し続けるかによって大きく変わるのだという。大体の目安として、電極部を体に押し付けてから五秒以上トリガーを押せば、相手は立ち上がれなくなるようだ。

「これはあくまで市販のスタンガンの話だ。俺の真っ赤なスタンガンはどれぐらいか。市販のものよりは威力が高く設定されているだ

ろう。まずは三秒を目安にやってみよう
あとは実験をするのみである。

第九話：襲撃計画

舞は夜のジョギングを欠かさないという。舞を襲うとなると、そのジョギングの時になるだろう。

「Y」の閉店時間まで外で待ち、舞が店から出てきたら自転車で後をつけていき、彼女の自宅を確認する。そして彼女がジョギングをするために家から出てきたら再度後をつけていき、ジョギングコースを把握する。そしてジョギングコースの中で、人通りの少ない場所、襲撃に適した場所などをチェックしてから舞を襲うわけだ。しかし、襲撃に成功したとしても、気絶した舞の体をどうやって触るのか。路上で触るわけにはいかないだろう。通行人に目撃されてたちまち通報されてしまう。それを防ぐには、どこか絶対に人が来ない場所に舞を運ばなければならない。だがそんな場所などあるだろうか。T市は人口二十万人のそれなりに開発された都市である。人気がない場所でも、何時間も人が通らないわけではない。数分おきに通行人が来るはずだ。それに、誰も来ない場所があったとしても、そこまでどうやって舞を運ぶのか。自転車で運べるものなのか。「スタンガンの威力を把握できないうちにごちゃごちゃ考えてもしかたがない。とにかく、ジョギング中の舞さんを襲うという仮定のもとで、実験を進めよう」

圭太は第一回目の実験方法を練った。

日が沈んでから自転車で市内を巡回し、適当な女性を見つける。その女性が人気のない場所に行くまで自転車でつけていき、襲撃のチャンスがきたら自転車を降り、走っていった一気に距離をつめ、背後から左腕で女性の胴体を締め付け、右手で背中にスタンガンを押し付ける。そしてトリガーを押して通電させ、心の中で「一、二、三」と数える。この三秒間の通電による効果をよく観察し、今後の目安とする。

「まず、相手が失神した場合だ」

相手女性が失神した場合、死亡していないか確認をとる。この確認をするには、心音を図るため女性の胸の中央に手をあてる必要がある。この時ついでに胸も触りたいが、それは相当に余裕がある時だけにした方がいいだろう。欲を出してこの段階で逮捕されたら元も子もない。胸を触ることは今回はあきらめ、心音の確認に専念することとした。相手女性が仰向けに倒れた場合は胸に手をあて心音の確認を、うつぶせに倒れた場合は、手首の脈拍の有無で生死を確認することとした。心音も脈拍も確認が困難な場合は、生死の確認にはこだわらず、逃走を最優先させることに決めた。

「相手が失神しなかったらどうする？」

次は、三秒間の通電により相手女性にダメージを与えたものの、失神までには至らなかった場合である。

この場合、失神させることにこだわって通電時間をいたずらに延長させると、相手女性を死亡させる恐れがある。そのため、失神しなくともあくまで通電は三秒でやめることとした。

「このスタンガンが実はポンコツで、相手にダメージをほとんど与えられなかったら？」

最後に考えられるのが、三秒間の通電でも、相手女性がさほどダメージを受けなかった場合である。

この場合、女性からの反撃が予想される。男とはいえ子供の圭太だから、大人の女性との格闘は不利である。格闘を避けるため、女性から反撃された時は何をおいてもまず逃げることにした。

「逃げようとしても追いつかれたらどうする？」

逃走しても女性に追いつかれ格闘となった場合には、ためらわずに三秒以上の通電を行い、逃走時間を稼ぐこととした。格闘の際、スタンガンを落としてしまうことも想定し、飛び出し式ナイフを携帯することに決めた。ナイフを使用すれば相手女性を殺傷する可能性が極めて高い。威嚇用にとどめておきたいが、ナイフを見せても女性がひるまずに襲い掛かってきた場合は、ある程度切りつけるのもやむを得ないだろう。相手女性の腕、顔などをためらわずに切りつ

け、逃走することとした。

実験全体を通じて特に気をつけることは、誰にも目撃されないことである。相手女性にさえ、自分の姿を見られないことが望ましい。

とはいえ顔を見られる可能性は非常に高い。襲う直前にストッキングをかぶって顔貌を変形させ、さらに帽子を深くかぶることとした。「夜の闇の中、相手と二人つきりになるのを待ち、チャンスがきたら後ろから一気に襲ってすぐに逃走し、自転車に乗って現場から離れるんだ」

相手女性が警察に事情を聞かれた時に「後ろから突然襲われたので犯人の姿は全く見えなかったし、何が起きたのかも分からなかった」と答えるのが理想である。

いよいよ決行の意思を固め、八月一日午後七時十分。圭太は黒色のＴシャツ、迷彩色の長ズボン、足には動きやすいよう運動シューズを履き、百円ショップで買ったストッキングと黒い帽子をバッグにしまい、真っ赤なスタンガンを左のポケットに、飛び出し式ナイフを右のポケットにしまい、マンションから出発した。

第十話：襲撃

夜間に女性を見つける場所といえは駅である。圭太は迷わずT駅へ向かった。

T市では電車の線路は全て高架式になっているので、市内に踏み切りは一つもない。T駅は二階建て構造で、電車は高架式の線路によってT駅の二階へ乗り入れる仕組みになっている。

T駅東口には交番があるので、圭太は西口で女性達を待ち構えることにした。

西口駅前は広々とした開放的な空間で、その中心には豊かな緑の葉をたずさえた高さ十メートルの大木が一本植えられ、場を引き締めるシンボルとなっている。その大木の周りをドーナツ状の道路がぐるりと囲み、バスやタクシーがせわしなく行き交う。その道路に沿ってコンビニ、ファーストフード店、レストラン、さらには銀行、郵便局まである。何から何まで揃ったいっばしの近代的駅前広場である。

ドーナツからやや離れたところに、自転車やバイクがずらりと並ぶ駐輪スペースがある。圭太はそこに自転車を止め、女性達を待つことにした。

「白線の内側にさがって……」というアナウンスが駅から漏れて聞こえてくる。高架を見上げれば電車がやってくるのが見える。電車が来るといふことは、女性達が下車して大量に駅前に出てくるといふことだ。圭太の胸は高まる。

仕事帰りのOL、学校帰りの女子大生、女子高生。OLと女子大生は一人で出てくる場合が多いが、女子高生は友人と固まって出てくることが多いようだ。単独の方が襲撃しやすい。OLと女子大生に絞り込む。女子大生は私服でジーパンを履いている者が多いようだ。これでは襲撃した時に動かれやすい。その点、OL達はスカートにハイヒールが多い。これは相当に動きにくいだろう。圭太はスカ―

トを履いたOL達に狙いを定めた。

圭太は今回の実験にあたって、被験体は美人にするか、美人でない女性にするか、まだ決めかねていた。痴漢はしたことがあっても凶器で女性を襲うのはこれが初めてである。記念すべき第一回目の襲撃なのだから、最初の犠牲者は美人で飾りたいという気持ちがある。しかし、美人を見つけたとしても、その美人が都合よく人気のない場所へ行ってくれるとは限らない。状況が整わないのに、こんな美人はなかなかいないからと襲いかかってしまえば、多数の人間に目撃されてしまう。そして警察へ通報されるだろう。最悪、通行人に取り押さえられるという新聞紙上でおなじみの大恥をかくことになる。今回は容姿の美醜にはこだわらず、人気のない場所へ行くかどうかという基準のもとで女性を選ぶことにした。

それにしても厄介なのは、女性達にティッシュを配っている大人の男三人組だ。彼らが働く店のユニフォームなのだろうか、三人とも同じ水色のポロシャツを着ている。ちらちらと駅前をうろつかれて邪魔でしょうがない。しかも、この男達はティッシュを配るために四方八方に顔を向けるので、時折、圭太のこともその視界に入れてくる。こう何度も見られては顔を覚えられてしまうではないか。圭太はコンビニやファーストフード店へ視線をやり、男達と目が合わないように心がけたが、やましいことを考えている時はかえって人と目が合いやすくなるもので、一番手前の男と目が合ってしまった。「まずいな」

顔を覚えられただろうか。不審者と思われただろうか。これ以上この男と目が合えば存在を意識され、いずれ女性達を物色していることに気付かれるだろう。男から視線をはずそうとしたが、再び目が合ってしまった。

「しまったな」

ティッシュ配りの男は圭太の存在を完全に認識したようである。その上、やましい目的でこの場所にいることもわずかに感じ取られたようだ。男は笑顔でティッシュ配りに精を出すかたわら、不審者を

監視する警察官のような顔で圭太を見てくるようになった。

「覚えられたな。場所を変えたほうがいいか。でもあんな奴のために、なんで俺の方が移動しなきゃいけないんだ」

対抗意識が働いて、危険だが、圭太はずっとこの場所にいることに決めた。

午後八時二十分。

ついに襲撃にうつってつけの女性が現れた。駅から一人で出てきたその女性は身長百五十センチほど。髪は黒髪で仕事のためだろうか、後ろできつく縛っている。白いワイシャツに黒のスカート、足にはハイヒールである。髪型も、服装も、歩き方も、どこか地味で覇気がなく、近づきたいような圧迫感はない。小柄なこともあり、最初の襲撃には最適の目標といえた。

女性は圭太の目の前を通り、高架沿いに歩き始めた。高架下の駐輪場も素通りである。自転車には乗らないようだ。この様子を見て圭太は彼女を襲うことに決めた。ティッシュ配りの男を見る。こちらを向いていない。チャンスである。

自転車に乗り、存在に気付かれないようライトは点けず、彼女の歩調に合わせてゆっくりと後をつけていく。近づきすぎないように、時折停車して距離をあける。駅前こそ賑やかだが中小都市の哀しさか、三分も歩けば辺りは街灯以外の光はなくなる。暗闇の中、圭太は二十メートルの距離を保ちながら彼女を追った。

五分後、女性は高架沿いを歩くのをやめ、左折して住宅街へ入っていった。より人気のない場所へ自ら移動してくれた彼女を圭太は静かにつけていく。

女性は住宅街の中をさらに数回右左折をして、より入り組んだ道へと入っていく。

ヘッドライトをつけた車が一台すれ違った。それ以外は彼女と二人っきりである。

二分経って、いよいよ状況が整った。女性が住宅街の小道から、さらに薄暗い、家と家の間に造られた狭い歩道へと入っていったので

ある。

これを見て圭太はいよいよ腹を決め、自転車を降り、四方を見渡して周りに人がいないことを確認した。周辺住宅の窓から人が覗いていないか、さらに住宅のベランダにも人がいないか確認した。誰もいない。

バッグからストッキングと帽子を取り出した。頭からストッキングをかぶり、さらにその上から帽子を深くかぶる。左手でポケットから真っ赤なスタンガンを取り出すと右手に持ち替え、スイッチが「最強」にセットされていることを確認する。準備を終えた圭太は歩道へと入っていった。

家と家にはさまれた狭い一本道の先に、女性の後ろ姿が小さく見える。足音をたてぬよう注意しつつ、圭太は早歩きで距離をつめていく。女性の後ろ姿が大きくなってくる。五メートル、三メートル、一メートル。胴体を締め上げるべく左腕を彼女へのばす。同時に右手に力を入れスタンガンを握り直す。

そして彼女の胴体を締め上げようとしたその時、圭太の心の中に叫び声が聞こえた。

「本当にこの人を襲っていいのか？」

圭太の一瞬の躊躇であった。

「この人はどこか気弱で、元気がなくて、自分が美人でないことを自覚しているように見える。そのことをコンプレックスにして、下を向いて、つましく生きているように見える。この人は襲うべき相手だろうか？」

彼女の覇気のない背中に、圭太はふと、容姿の醜さを理由に芳樹にいじめられた日々を重ねた。醜い顔を見せるなど言われ、直せと言われ、虐げられた日々。容姿というのは生まれた時に決まってしまうものだから、他人の芳樹にとやかく言われても、圭太にはどうすることもできなかった。それなのに容赦なく嫌がらせをされたあの悔しさ。あの悔しさを、この覇気のない女性も味わってきたのではないか？髪形、服装、歩き方から伝わってくるこの陰鬱な雰囲気は

いじめによるものではないか？この人は職場でいじめを受けているのではないか？そして今、その疲れた心と体を癒すために、帰宅しようとしているのではないか？

彼女は目と鼻の先にいる。少し手をのばせば、この真っ赤なスタンガンを押し付けることができる。だがこの寂しい背中に高圧電流を浴びせることが、正義と言えるだろうか。

テレビニュースでは、少年達による凶悪犯罪が連日報道されている。「あいつらはアドルフ・ヒトラーに憧れてるだの、自分は神だの、そんなことを言えば周りが怖がってくれると信じてる」

少年犯罪者達はいっぱしの凶悪犯を気取っているが、いざ襲うのは中年女性だの、自分を振った同級生だの、腰の曲がった老夫婦だの、圭太から見れば笑いをとるための三文芝居であった。

「あんな低脳な奴らと一緒にいたくない」

寸でのところで襲撃を中止し、圭太は彼女に気付かれぬよう、そつと後ろへ振り返って帽子とストックキングを脱いだ。そしてスタンガンをポケットにしまうと、歩道を逆戻りして去っていった。女性は何も気付かないまま一人歩道を歩いていった。

圭太は自転車へ戻ってみると、襲撃を中止したことは正しかったとあらためて感じた。

あのティッシュ配りの男がいたのである。この男は圭太の後をつけていたのだ。圭太が歩道へ入り込んだ瞬間は見損なったらしく、自転車の付近をしつこく搜索していたようである。もしも女性を襲って悲鳴でもあげられていたら、この男が飛んできて取り押さえられていただろう。

男は性犯罪者と断定した視線を圭太に送ってくる。その視線を無視して自転車に乗ると、圭太は男の目の前をこれみよがしに通り過ぎ、走り出した。

「周囲に人がいないかあれだけ確認したのに、この男につけられていることに気付かなかった。本気で尾行されると気付くのは困難だな。今後の課題にしよう」

圭太は五十メートルほど走ってから自転車を止めて振り返ってみた。これだけの距離をとつても、男はあいかわらず圭太を見ていた。

「しつこい野郎だ」

相手は屈強な大人の男である。下手に刺激すると追いかけてこられそうなので、すぐに目線はずし、圭太は自転車を走らせた。

第十一話：おさまらぬ怒り

実験中止の翌朝。午前九時。マンションのリビングルーム。

圭太は寝不足の体を、高級ソファに沈めていた。両目は重いまぶたによって半分ふさがり、焦点が合わないまま、テレビ画面に向けられている。

右手にコーヒーカップを持ち、せわしなく、口に運んでいる。もう、何杯のコーヒーを胃に流し込んだらうか。圭太の舌は、蛾の羽のように気色悪く茶色に染まっていることだらう。胸の動悸が激しく、呼吸が落ち着かない。

圭太は自作DVD達 芳樹の写真を見て以来、ほとんど刺激を感じなくなった。を、もう三時間も見続けている。いや、見てはいない。何となく視界に入れているだけだ。

寝不足で鉛のように重くなった脳から、一握りの思考力をしばらくだす。圭太は真っ赤なスタンガンの実験の進め方を探していた。

圭太は、特定の女性達を実験対象からはずすことにした。圭太自身の辛い思い出を重ねてしまうような女性。自分の容姿が美しくないことを自覚している女性。わがままを言わず、つつましく生きている女性。

圭太は、他の少年犯罪者にはできない、高度な内容の実験にできなかった。

（俺は、道端で女に声をかけるのは得意だからな。これを生かしたい）

とびきりの美人に声をかけて親密になり、その上で裏をかいて重大な危害を加える。そうすれば、女性に正面から声をかける勇気がなく、一方的な、いわば奇襲のような犯行しかできない。それでいて自分は歴史に残る凶悪犯だと自称する。他の少年犯罪者に大きな差をつけられるだろう。

（女に声もかけられない奴らと同じことはしたくない。実験の時

さえ、とびきりの美人を選ぶんだ」

圭太は妥協のない、完璧な犯罪者になると決意した。

ふと、昨晚、後をつけまわしてきた男のことを思い出す。

一般市民は、犯罪に対して無警戒に暮らしていると思い込んでいた。だから、駅前で立っている時の表情、通りすぎる女性への視線のやり方、これらにわずかな不自然さがあっただけで、尾行をされたことは驚きであった。

「あの野郎。俺をつけまわして正義のヒーローのつもりか！」

尾行などという、刑事ドラマまがいのことを、一般市民の男にされたことが気に食わなかった。あの男は、女性を救う、かつこいヒーローのつもりだったのか。見ず知らずの女性を救うことで、世の女性達から人気を得たかったのか。そのような姑息な売名行為のために、後をつけまわしてきたのか。

圭太はソファから立ち上がった。こぶしは、固く握り締められている。ソファの上にあるクッションを、あの男に見立てて怒鳴りつけた。

「一般人のくせしてつけ回してきやがって。俺を捕まえれば、お前は世間のヒーローになって楽しい人生を送るんだろ。でも、俺は大恥をかくんだぞ！そんなことも考えられないのか！どんな時だって、人を蹴落とすような真似をしちゃいけないんだ！常識を学べ！」

こぶしを振り上げ、クッションにえぐるようなパンチをお見舞いした。さらに数発殴りつけたが、クッションは柔らかく、しかもソファの上にあるので、手ごたえがない。そこで、今度は足蹴りをお見舞いすることにした。クッションはソファから吹っ飛んで、壁にぶち当たった。

「常識を学べ！！ 常識を学べ！！ 常識を学べ！！」

出せる限りの大声を、クッションに、いや、あの男に向かってぶちまけます。

「人の人生を何だと思ってるんだ！！」

床に転がった「あの男」を、両足で踏み散らした。頭蓋骨が砕け、内臓が破裂する姿を想像しながら、「あの男」を数十発踏みつけた。圭太の怒りはそれでもおさまらなかった。飛び出し式ナイフを握り締めると、マンションから飛び出した。自転車にまたがり、丁駅に向かつて爆走した。

「あの野郎。ナイフでメッタ刺しにしてやる！」

怒鳴り散らしながら、住宅街を駆け抜けた。大声に驚いて、振り向く通行人がいることが心地よく感じられた。

「メッタ刺しにしてやるよ！」

暴走自転車は、あつという間に丁駅前に着いた。額に吹き出た汗は放っておいて、圭太は西口を見渡した。ティッシュ配りを三人見つけたが、これは全員女性だった。あの男はいないようだ。

「あの野郎。逃げやがって」

ティッシュを配っている女性達は、全員、あの男と同じ水色のポロシャツを着ている。同じ店の従業員なのだろうか。

「あの野郎の女なのか。こいつらは」

三人とも今時の雰囲気、可愛らしい顔立ちをしていることが、かえって気に食わなかった。

（あの男が俺をつけまわしたことは、世間的には正しいんだろう。特に女達にとって、あの男はまさに、正義のヒーローだろう）

圭太は、女性達の目の前へ自転車を止めた。そして、もったいぶってゆっくり降りると、女性達を睨みつけた。2人の女性は、圭太の異様な雰囲気を感じたようだ。関わりたくないと思ったのだろう。だが、残る一人は、圭太の殺気と憎悪に気付くことができなかったようである。彼女は圭太に近づいていつて、ティッシュを渡そうとした。圭太は瞬間、頭に血が上った。差し出された彼女の手を、思い切り殴りつけた。

「痛い！」

衝撃で女性の手首はひん曲がり、ティッシュは地面に叩きつけら

れた。

「お前はあいつの女なのか！ お前もあいつの味方をするのか！」
怒声が駅前中に響いた。

女性は赤くなった手を、もう一方の手でおさえ、呆然と圭太を見ている。三秒ほど沈黙した後、ティッシュを拾おうとしゃがみこんだが、その頭上に、圭太の怒声が浴びせられた。

「あいつを呼んでこいよ！ メッタ刺しにしてやるよ！」

「あの、私、何かしましたか？」

女性は圭太を見上げながら、必死に事態を把握しようとしている。

「意味がわからないんですけど」

「意味がわからないじゃないだろう？ 無難なことを言って逃げようってのか？ 俺の言ってることに答えるよ。あいつを呼んで来い！ お前あいつの女なんだろう？」

他の2人が駆け寄ってきた。2人もまた、圭太が怒鳴る理由が分からないようだ。通行人達も足をとめて、何ごとかと、こちらを見ている。圭太は周囲の視線は無視して、しゃがみ込んでいる女性を怒鳴り続けた。

「早くあいつを呼んでこい！ お前はあいつの女なんだろう？ 早く呼んでこい！」

女性は腰が抜けたのか、立ち上がれないようである。唇は小刻みに震え、何か言わなければと急いているようだ、言葉が出てこない。

「黙ってれば逃げられると思ってるのか！ 早くあいつを呼んでこいよ！ 人の人生を何だと思ってるんだ！」

横で見ていた二人のうち、一人が東口へ走っていった。残った一人が口を挟む。

「あの、あいつって誰なんですか？」

「うるさい！ お前には聞いてない！ こいつに聞いてんだよ！」

彼女のことは相手にせず、涙目で座り込んでいる女性を、さらに怒鳴りつけた。

「黙って済まそうとしてんじゃねえよ！ 俺の言うことに答えるよ！」

その時、圭太は東口から不穏な気配を感じた。女性の気配ではない。屈強な男の気配である。振り返って見ると、東口に向かった女性に連れられて、男が三人、こちらへ駆けてきている。男達は三人とも、水色のポロシャツを着ていた。

「どうした？ 絡まれたって？」

男達が目の前にきた。そして、圭太と女性の間に割り込み、立ちふさがった。

圭太は三人を見上げた。一人と目が合った。目が合った男は紛れもない、昨晚、圭太をつけまわしたあの男だった。

「しまった！」

圭太は体を回転させ、自転車に飛び乗ると、猛スピードで人だかりに突っ込んでいった。反動で、腰の曲がった老人を転倒させた。それにはかまわず、駅前から、あつという間に消えていった。

散々怒鳴られた女性は、呆けて座り込んでいた。男達は彼女を抱え上げ、今の子供は一体何者なのかと問い掛ける。女性はショックで何も答えられない。だが、圭太と目が合った例の男だけは、自体を飲み込めたようである。

「あのガキ。昨日見た奴だな」

圭太は駅から少し離れた、丁団地の入り組んだ路地に身を潜めていた。

散々呼べと言っていたにも関わらず、いざ男が現れると逃げ出してしまった。

「今ごろ丁駅前では人だかりができていて、皆で俺を笑ってるだろう。威張っていたくせに、いざ男が来たら逃げ出しやがったと、大笑いしているに違いない」

圭太は団地を出て、市内の巡回を始めた。そして例の、自転車で追い抜きざまに女性の尻を触るという痴漢行為を始めた。真昼間に

痴漢をするのは、これが初めてである。

触るというよりは、尻を引っぱたくという表現の方が合うだろう。
今までにない乱暴な触り方になっていた。

第十二話：大転倒

「しつこい女だ！」

圭太は自転車のハンドルを強く握り、腰をサドルから浮かして、前傾姿勢になった。両足に力を入れ、目一杯ペダルをこいだ。自転車はスピードを上げていく。

猛スピードでT字路に突っ込み、体を右に倒す。景色が斜めに傾く。タイヤの右端だけが、かろうじて路面を捉える。

右折した先は、長い直線道路になっていた。

（チャンスだ！ ここで振り切ってやろう）

足に鞭打って、ペダルを激しく回転させた。自転車の速度はみるみる上がり、やがて最高潮に達した。後ろを確認してみる。

「だめだ！ 距離が広がってない！ 女のくせに、何て体力なんだ！」

二十メートル後方に、女性に乗った自転車が、ピタリと圭太を追跡していた。女性は猛然とペダルをこいでいる。髪の毛を振り乱しながら、圭太同様、腰を浮かせ、前傾姿勢で突っ込んでくる。「待ちなさいよ！」と、怒号がぶつ飛んできた。

圭太は駅前から逃走した後、女性達の尻を引っぱたく痴漢行為を始めた。一瞬、何が起きたのか分からずに、呆然と立ち尽くす女性達の姿が、面白くてたまらなかった。これに機嫌を良くした圭太は、快調に、十個ほどの尻を叩いて回った。そして、つい三十分前に、この女性の尻を、思い切り引っぱたいたのである。

「やめてよ！ この馬鹿！」

思わぬ金切り声が上がった。それまでの女性達とは、勝手の違う相手だった。この女性は立ち尽くすことはなく、すぐに走り出し、圭太を迫っかけてきたのである。

その時、彼女は徒歩だったうえに、スカートに、ヒールという格好だったから、自転車に乗った圭太を取り押さえることはできなかった

った。

難なく逃げおおせた圭太だったが、彼女の執念はすさまじかった。自宅へ戻った後、ご丁寧に、スポーツ用のジャージとシューズに着替えたようだ。そして、自転車に乗って、圭太を探し回っていたようである。五分ほど前、彼女は圭太と鉢合わせするや、「謝りなさいよ!」と怒鳴り散らしてきた。そして、逃げ出す圭太に喰らい付いたのである。

(面倒なことになった。あんな女のケツなんて触るんじゃないかった) 逃走を続ける圭太は、住宅街へ入った。ぎつしりと、一戸建て住宅が並んでいる。おかげで、死角が多い。追跡者をまくには丁度良かった。

狭い小道へ、自転車を倒して突入する。次の曲がり角を素早く見つけて、猛スピードで突っ込み、姿を隠す。

彼女との距離が、少しずつ、開いていく。

(いいぞ。このままグチャグチャに曲がりくねってしまえば、いずれ、俺のことを見失うだろう)

角を見つけては突っ込んでいき、死角に潜り込む。巧みに姿を隠し、女性を引き離していく。

五分経つと、後ろを振り返っても、彼女の姿は見えなくなった。

圭太は、足の回転を落とした。

(もう、大丈夫だろう)

慎重に、右左折を繰り返しながら、圭太は少しずつ、住宅街の出口へと向かった。

(あの女は住宅街の中で迷ってるはずだ。その間に脱出して、遠くへ逃げよう)

数分後、出口に着いたが、圭太は自分の目を疑った。住宅街の中をさまよってるはずの彼女が、自転車にまたがり、待ち構えているではないか。

「待ちなさいよ!」

金切り声が響き渡った。同時に、彼女は自転車を発進させた。髪

を振り乱し、自転車ごと体当たりしてきた。

「あぶない！」

自転車を左へ滑らせ、間一髪でかわした。

やむなく、圭太はもう一度、住宅街の中へ戻った。

「待ちなさいよ！」

「ヒステリー女め！ しつこいんだよ！」

手近の角へ突っ込み、姿を隠す。懸命にペダルをこぐ。曲がり角を見つければ、すかさず突入する。

「待ちなさいよ！」

もう一度、角を曲がる。

「待ちなさいよ！」

「いつまでついてくるんだ！」

物凄い執念だ。

小道を右前方に見つけた。せまく、薄暗く、隠れるには絶好の場所だ。

（あそこだ！）

体を右に倒し、小道に突っ込んだ。

だが、

「何だ！ 人が！」

と絶叫した。

突っ込んだ先には人がいた。このままでは正面衝突するしかない。

圭太は、とつさに急ブレーキをかけた。自転車を思い切り左に倒し、後輪が相手の体をかすめた。自転車はぶつ倒れ、体は投げ出された。

その一瞬の中で、今、あやうく衝突しそうになった人物は、圭太好みの、かなりの美人であったことは見逃さなかった。

（俺はこのまま倒れて地面に叩きつけられるだろう。でも、これくらいは衝撃なら、両手で支えられそうだ。大した怪我にはならないだろう。もしかしたら、ほどよく怪我したおかげで、今の美人が話し掛けてきて、仲良くなれるかもしれない）

圭太は転倒し、地面に叩きつけられた。落下中に予想したとおり、一番最初に両手が地面に着き、しっかりと体を支えた。おかげで、顔を地面に打ち付けるようなことはなかった。手のひらを軽く擦りむいただけだ。自転車の方も、大した損傷はない。

今、衝突しそうになった女性、蓮田真理子はすた まりこが、顔面蒼白でこちらを見ている。

（手を擦りむいたな、ヒリヒリする。だが、そんなことはどうでもいい。美人さんは、こっちに来るかな？）

「大丈夫？」

真理子が駆け寄ってきた。

「うっ、痛い。痛い」

「痛いの？ どこか怪我したのかな？」

「手を擦りむきました。血がにじんで、とても痛いです」

「ほんとだ。痛そう。ごめんね。私、飛び出しちゃって。でも、大した怪我じゃなくてよかった」

（手のひらを擦りむいただけじゃ、インパクトが弱かったか）

「肘も擦りむいたし、膝もいたいです。他にも、痛いところが沢山あります」

圭太は体のあちこちを指差した。そして、ゆっくりと、時間をかけて、ふらふらと立ち上がろうとする。だが、失敗して、後ろへ倒れていきそうなそぶりをする。

「ああ、力が入らない……」

「あぶない！ 頭を地面にぶつけちゃうよ！」

真理子とはつさに、圭太を抱きとめた。

「力が入らないの？ 体中痛めてるのかな？ いいよ。しばらく、このままで」

真理子は、地面に両膝をつき、左腕で圭太の体を抱えて、自分の膝の上に乗せた。右腕は圭太の後頭部に回し、頭を支えた。

圭太は、首の力を抜いた。頭を重力にまかせて後ろへ垂れ下がるようにし、真理子はずっと頭を支えていなければいけないようにし

た。

「体中が、痛いです」

「ごめんね。飛び出しちゃったからね」

「悪いのは僕です。よく確認しないまま、猛スピードで曲がっちゃったから。あなたのせいじゃありません。ところで、この辺に住んでる方なんですか？」

「うん。すぐそのアパートに」

「そうですか」

圭太はニヤリと笑った。

「だったら、今からアパートに連れて行ってもらえませんか？」

「今から？ どうして？」

「氷を頭に当ててほしいんです。転んだ時、おでこを地面に打ちつけたので」

「それは痛そうだね。でも、いきなり家って言われても」

真理子は、わずかに怪訝な表情を浮かべた。もう少し、じっくりと会話をしてから、家に行きたいと言うべきだったか。

（大きいおっぱいだなあ）

圭太の眼前には、真理子の右胸が迫っている。胸ごしに、首から下げたネックレスが見える。

（何としても、家にあがり込んでやる）

「女の変質者に追われてるんです。さっき、自転車で追い抜く時に、肩が少しぶつかっただんです。そしたら、お尻を触られたとか、痴漢だとか、大げさなことを言っ、追いかけてくるんです」

「変質者？」

「思い込みの激しい人みたいです。話し合っ、て、和解できる相手じゃないですよ。だから、一旦、姿を隠したいんです。どうか、僕をアパートに入れてください」

「私の家より、警察に行ったほうが」

「そんなことをしたら、どんな復讐をされるか分かりません」

「そんなに危ない人なら、なおさら警察に行ったほうが」

（しつこいな。さつさとアパートに入れるよ）

いらだつ圭太だったが、真理子はまだ、「アパートに行こう」とは言わない。

その時、女性の怒鳴り声が聞こえてきた。

「どこに隠れてんのよ！ 早く出てきなさいよ！ 隠れたって無駄だからね！ アタシは何時間でも待ってやるから！」

姿は見えないが、物凄い迫力だ。圭太は思わず肩を震わせ、真理子の体に潜り込む。

「今の声が、僕を追ってる変質者です」

「聞こえたよ。すごい声だね」

「こつちに、気付いてませんか？ もしも見つかったら、何をされるか分かりません」

「声の出し方が普通じゃないよね。ちょっと、イツちゃってるよね」

真理子の表情が変わった。恐ろしい女の変質者から、自分が、この小さな子供を守ってやらねばと考えているようだ。

「よし。私のアパートに行こう。相手の興奮が収まるまで、隠れてたほうがいいみたい」

「ありがとうございます。僕、すごく怖かったんです」

真理子は、圭太の手をとって立ち上がらせた。「ちょっと待って」と言って、手提げバッグからハンカチを取り出す。

「ばい菌が入っちゃうから、手のひらから、砂埃を払わないと」

「ありがとうございます」

「顔にも砂がついてるね。服も埃だらけになっちゃって」

真理子は手際よく、圭太の体をハンカチで軽くはたき、埃をおとしていく。

さらに、圭太の自転車を起き上がらせると、「私が押していくからいいよ」と、アパートへ向かって歩き始めた。

「ありがとうございます。何から何まで」

圭太は、真理子の後を付いていった。

「どこにいるのよー！」

女性の怒鳴り声が、相変わらず響いている。

「お前のおかげで、美人さんの家に行けるよ」

真理子の尻を眺めつつ、圭太は呟いた。

ふと、真っ赤なスタンガンのことを思い出す。

（怒りにまかせて家を出たけど、持ってきてたっけ？）

ポケットをまさぐってみる。四角形の、固い感触があつた。間違いない。

（ついてるな。スタンガンはちゃんとある。えらいぞ、俺）

第十三話：真理子への実験

「優しくて元気なお母さんになんてなりたくない」

「何が何でも、明るいお母さんになんてなりたくない」

「息子にぶら下がりっぱなしのお母さんでいたい」

「家庭を照らす、太陽のようなお母さんになったら、誰にも助けてもらえなくなるじゃない」

「暗いお母さんでいることが、息子に悪影響を与えるのは分かっている。でも、それを責めないでほしい。私は疲れ果てているから」

「私に母性なんて求めないでちょうだい。でも、あなたはいつも元氣な息子でいてね」

「料理を作るということが、どんなに嫌な作業か分かってるの？」

午後七時。真理子のアパートの部屋。

キッチンで、真理子が夕飯の準備を始めると、圭太の体は冷たくなった。鍋に向かう真理子の後ろ姿は微笑ましいものであったが、圭太の目には、怒り狂った悪鬼の後ろ姿に見えた。耐え切れず、圭太はテレビに視線を移した。ブラウン管上で、二人組のお笑い芸人がネタを披露している。

芸人達は結婚を題材にミニコントを始めた。突っ込み役の芸人が、結婚への夢を語り始めた。

朝、目を覚ますと、新妻が作ってくれた味噌汁の匂いが、キッチンから漂ってくる。そんな新婚生活が夢だと言っている。

「料理が好きな女なんているもんか。女にとって料理なんて、嫌で嫌で仕方がないんだよ」

芸人は夢を語り続ける。味噌汁の匂いの後、新妻の包丁の音がトントントンと 聞こえてくるのだと言っている。

「そんなことが起こるわけがない。朝食なんて作らせたら、相手の

女は怒り狂うに決まってる」

芸人はさらに、笑顔で語り続ける。結婚相手は、料理が上手な女性がいいと言っている。

「料理が上手でも、料理をすること自体は大っ嫌いなんだよ。料理が好きな女なんていないんだよ」

圭太はテレビを消した。

エプロン姿の真理子の背中を、恐る恐る眺めてみる。

真理子はパスタを作っている。

「女らしさをアピールするために、仕方なく料理をしてるんだろうな」

パスタが茹で上がったようだ。お湯を切って、皿にのせた。真理子は手作りのトマトソースをかける。

「缶詰のトマトソースで済ませればいいのに。手作りなんかめんどくさいって、本音を言えばいいのに」

皿を二つ抱えて、真理子が出て来た。テーブルに、真理子特製の、真っ赤なパスタが二つ並ぶ。

「お待たせ」

真理子は笑顔で圭太を見る。

「もう、七時だね。お腹空いたでしょう？」

「はい。もう、お腹ぺこぺこですよ。真理子さんの料理、とってもおいしそうですね！」

「少し、味が薄いかもしれない」

「気にしないでください。僕は、薄味の方が好きなんですよ！」

圭太はフォークを手にする。

「いただきます！ うわ、おいしい！」

口の中に、トマトソースの味が広がる。

「市販の缶詰のソースなんかより、はるかにおいしいです！」

「ほんと？ よかった！」

真理子は嬉しそうに笑い、フォークを取った。

「圭太君はお金持ちの息子さんだから、高いお店の料理を食べて育

つてるでしょう？舌は確かだろうね」

「味付けは丁度いいですよ。僕は父に連れられて、沢山の高級レストランに行きました。真理子さんの味付けは、一流のシェフにも引けを取りませんよ」

出来たての熱いパスタを口に含みながら、それでいて、圭太の体は、まだ冷え切っていた。

（褒めてやらないと、どんなヒステリーを起こされるか分からないからな）

真理子に紅茶を入れてもらった。圭太は大のコーヒー党だが、それについては語らず、自分は紅茶が好物だと伝えた。

紅茶の赤い色を見る。赤い色。真っ赤なスタンガンである。

圭太はフォークを置き、右手をポケットに入れて、真っ赤なスタンガン握った。

「僕、将来は物理学者になりたいんです」

「物理学者？」

「僕、電気に興味があるんです」

「電気？ 圭太君まだ小さいのに、電気に興味があるの？ すごいね。私は文系だから、電気関係はぜんぜんだめだよ」

「電気の勉強の為に、県立科学館によく行きます。真理子さん、科学館の売店で、おもしろい物を手に入れたんですよ」

圭太はポケットからスタンガンを取り出した。怖がらせぬよう、真理子から距離を置いて、遠目に見せる。

「子供用のおもちゃのスタンガンです」

「きれいだね。真っ赤に塗られてる。私、スタンガンなんて始めて見たよ」

「科学館の売店にしか売っていません。けっこう、レアな代物なんですよ」

「『最強』『最弱』って書いてあるね。なんか怖い」

「子供用のおもちゃですから、威力はありません。三秒ほどお腹に

通電させると、全身に電気が走る感覚を体験できるんです」

「へ」

「僕もやってみました、言葉では表現できない、不思議な感覚でしたよ。これのおかげで、より一層、電気に興味を持つようになりました。開発者は、子供達に電気のおもしろさを学んでもらいたかったのです」

圭太はまず、「最弱」にセットしたスタンガンをお腹に当てる。

「1、2、3……。少し、ピリツときました」

スタンガンの安全性をアピールする。

「大丈夫なの？」

「全然平気ですよ。一度覚えると、病みつきになります」

真理子に「最弱」を当ててみようとする。真理子は腹部に当てるのを怖がって、指先で触ろうとした。

「指で触るのは危険です。知ってますか？ 爪って、電気を吸収しやすいんですよ。肉で守られているお腹の方が、安全なんですよ」

「そんなことあるの？」

「電気技師の間では、『爪は絶対に感電させるな』って常識ですよ。恥ずかしいですよ？ 真理子さん。子供の僕でもこれぐらいのことは知ってるのに」

真理子は納得したようである。真理子の腹部に「最弱」を当てる。

「うん、何か変な感じ。おもしろいね」

「次は『最強』です。これは結構効きますよ」

「最強」にセットされたスタンガンを真理子に見せる。圭太は自分の腹部に当てた。が、腹に電極が触れる寸前に、人差し指をスライドさせ、「最弱」に戻していた。

「1、2、3……。おお、『最強』は結構きついかも」

高圧電流を浴びているかのように、大げさに震えてみせる。

「でも、もう慣れちゃったな。物足りないや」

同時に、笑顔を絶やさないようにする。額にしわを寄せたり、苦痛に歪んだ顔をしてはならない。笑って済ませる程度の痛みでしか

ないことを、真理子に印象付けなくてはならない。

「さて、今度は真理子さんの番ですよ」

「大丈夫かな？『最強』でしょ？怖いよ」

「弱虫だなあ。科学館の中じゃ、小学生の女の子達が、『最強』に感電して遊んでいるのに」

圭太は人差し指を上スライドさせた。

「いきますよ？」

「うん」

「最強」にセットされた真つ赤なスタンガンが、真理子の体に吸い付いた。

圭太はカウントを始めた。

（い……）

その瞬間、真理子の体は足から頭まで、棒のように一直線に伸び上がった。巨大な腕が、真理子の頭をわしづかみにして、思い切り上へ引つ張り上げたようだった。彼女の体は一直線に固まり、そのまま後ろへ倒れた。頭を床に打ちつけたのだろう　鈍い音がした。髪の毛は磁石で吸い上げられたように逆立ち、眼球は、外へ半分飛び出していた。口はポカンと開き、横から泡を垂らしている。

三秒どころか、「一」さえ数え終わらぬうちに、真理子は激烈な失神をとげた。予想外の光景に、圭太は動揺した。

「悲鳴すらなかったが、死んでしまったのか？」

真理子は体をまっすぐに伸ばしたまま、床に倒れている。意識は完全にない。

「どうしよう。救急車を呼んだ方がいいんじゃないか？」

圭太は、携帯を取り出し、「1……1……1……」とボタンを押した。

「でも、救急隊員に、何と説明すればいい？」

インターネットで買ったスタンガン　しかも、おそらく違法な改造をされている　を使用して、この女性を失神させましたとも言っのだろうか。救急隊員達は、ためらわずに警察へ通報するだろう。圭太のエリートとしての人生は、その瞬間に、終わりを告げ

る。

最後の「9」を押す前に、真理子の胸が、圭太の視界に入った。
（大きなおっぱいだなあ）

圭太は、真理子を失神させた目的を思い出した。真っ赤なスタンガンの威力の実験。その為に、真理子を失神させたのだ。そして、それは成功した。「最強」は、女性の意識を奪うに十分な威力があることが証明された。首尾よく失神させることが出来たのだから、あとは真理子の体を、思う存分弄べいいではないか。そして、その様子を、ビデオカメラで撮影すればいいではないか。これだけ派手に意識を失ってくれたことは、圭太にとって、好都合なはずである。

圭太は右手を、真理子の胸の中央に当てた。指先に心音を感じる。「生きている」

真理子の体全体を眺めてみる。腹部がゆっくりと上下に動いている。手や足に、痙攣はない。

（死ぬような気配はないな。救急車は呼ばなくていい。それよりも、真理子さんのおっぱいを早く触ろう）

中央に当てた手を、横に移動させようとする。

だが、目をひんむき、口をポカンと開け、体をまっすぐに伸ばして倒れている、この異様な姿の真理子を見ると、圭太は途端に、正気に戻ってしまった。

「だめだ。やっぱり真理子さんは死ぬかもしれない。このまま様子を見た方がいい」

女性らしさが損なわれたこの真理子の姿に、欲情することは不可能だった。

圭太は風呂場に行き、タオルを調達すると、水で濡らして折りたたみ、真理子の額に置いた。

第十四話：標的の再確認

翌日。午後十二時。喫茶店「Y」。

店内は賑やかな空気に包まれていた。

そこかしこのテーブルで、男性客達がせわしなくコーヒーを飲んでいる。

店長はカウンターで、メニューの聞き取りに忙しい。

ここ数日、「Y」は目に見えて男性客が増えており、店内は早朝の駅のプラットホームのような騒々しさだった。

「今日は元気ないね」

舞が圭太に尋ねた。

「いつもより二時間も遅く来たし、食欲もないみたい。何か悩み事でもあるの？」

「いえ、悩んでるわけじゃないんですけど」

圭太は顔を上げた。

「何か元気ないよ？いつもの圭太君と違う感じがするんだけど」

舞は食器を片付けながら言った。

「悩んでる事があるなら、何でも言ってね。私と圭太君の仲なんだからさ」

舞の言葉に、圭太の胸は高鳴った。

（昨日の夜、あんなことがあったからな）

圭太は、思い出した。

昨晚、真っ赤なスタンガンの実験を真理子に行った。高圧電流が

真理子を襲い、彼女は後ろへひっくり返った。

壊れたマネキンが、蹴り倒されたようだった。

クーラーの効いた部屋の中央で、真理子は冷凍食品のように固まって倒れていた。24歳になったばかりの、若く美しい女性が、自分の眼前に横たわっていた。が、その体からは、女性的な温もりや、柔らかさを感じることはできなかった。冷え冷えとした、

人間の形をただけの、鉄の塊のようにしか見えなかった。真理子の胸に伸びかかった手は、寸でのところで止まってしまい、欲情はすっかり萎えた。

あとはただ、濡れタオルで彼女を介抱するばかりだった。

「昨日、いろいろと嫌なことがあったので」

圭太はうつむいて話した。

「嫌なこと？」

舞が問い返した。

「圭太君、それで今日は元気がないんだ。私は元気な圭太君が好きだからさ、嫌な事があったなら、何でも私に言ってね。それで圭太君が少しでも元気になってくれるなら、私も嬉しいし」

「僕自身の問題です。舞さんが心配することはありません。大した問題じゃないんです」

「大した問題じゃなくても、悩んでるなら私に話してね。一人で抱え込まないほうがいいよ。私でよければ、いつでも相談に乗るよ」

圭太は、胸が熱くなるのを感じた。

「うるさいな」

千恵子がつぶやいた。

「他の客がいるんだから、静かにしなさいよ。みんな、迷惑そうな顔をしてるじゃない。店の評判が落ちたらどうするのよ。」

食器を持ったまま、客と立ち話をするなんて」

「すみません。すぐに下げますから」

舞は顔を強ばらせ、キツチンへと消えていった。

「舞さんは何も悪くありませんよ」

圭太が反論した。

「他の客だつてにぎやかにしてるじゃないか。うるさいのは、お前みたいな馬鹿のほうだろう」

圭太は視線を千恵子へ移した。

千恵子は黙ったまま、店の外を眺めている。

圭太が、わざと大きな声で千恵子への皮肉を言ってみても、彼女

はおそらく、無視を決め込むだろう。

こんなヒステリー女に構ってもしかたがない　　圭太は再び、真理子に思いを馳せた。

「正氣に戻って、今ごろ警察に通報してないだろうな」

呆けた顔の真理子を思い出す。

圭太は、意識を取り戻した真理子に向かって、感電の原因をまくし立てた。

真理子が首に付けていた金属製のネックレスに、電気が集中してしまったと。ネックレスのチェックを怠った自分のミスだと。

そして、放心状態の真理子に土下座をした。

僕は世界一の馬鹿です　　。どうぞ、僕を嫌ってくれて構いません　　。

警察へ通報されるくらいなら、どんな恥でもかいてやろうと思った。その圭太の願いが通じたのか、真理子はスタンガンの

過剰な威力については言及せず、彼女の失神は、単純な事故であったと認めた。

「圭太君、気にしないで。私は何ともないから」

真理子は、圭太を気遣う言葉さえ言ってくれた。

（一晩経って、気が変わってないだろうな）

圭太はコーヒーをすすりつつ、思索した。

（今頃、警察に通報してるかも……。真理子さんの携帯に電話をして、様子をうかがってみようか？

いや、下手に刺激しないほうがいい。彼女のほうから連絡をとってこない限り、俺からは何もしないでおこう）

あの女とは、もう二度と会わないだろう。これ以上、関わらないほうがいい　　。

圭太がそんなことを考えていた時、舞がキッチンから出てきた。

「舞さんて、ホントに可愛いな」

圭太は、舞を眺めた。舞は、他の客のテーブルの前に立ち、注文

をメモに取っている。真夏の太陽のように、輝いて見えた。

店内にいる男性客のほとんどが、同伴者と談笑するかたわら、獲物を狙う獣のような目つきで、舞のことを見つめている。

はやく俺のテーブルに来てくれ　と、舞に懇願しているように見えた。

舞はそれに気付いていないのか、男達を視界に入れることなく、ハリのある大きな声で、注文されたメニューを店長に告げている。

「あの可愛さを、壊したくない」

圭太は独り言を言った。

「舞さんの可愛さを壊さないまま、意識を失ってほしいんだよ。真っ赤なスタンガンは、威力が強すぎた。

髪の毛を振り乱しながら、頭から足の先まで一直線に固まった舞さんなんて見たくないんだ！」

舞の可愛らしさが、そのまま保存された状態で、意識を失ってほしい。その舞を手に入れてこそ、

自分の目的は果たされる。それ以外に、自分の舞への興奮を満たす方法はない。

ふと、圭太の目に千恵子が映った。相変わらず、圭太を視界に入れないように、そっぽを向いている。

（お前なら、真っ赤なスタンガンをいくらだって浴びせてやるんだが）

「圭太君、コーヒーのおかわりはいる？」

舞が話し掛けてきた。

「いえ、今日はもう帰ります」

圭太は席を立ち、レジへ向かった。舞がレジについた。

「1580円……。丁度お預かりします。圭太君、またね！」

「はい、また明日も来ます！」

圭太は店を出ながら、もう一度、舞を見た。

舞は笑顔で、こちらに手を振っている。

（やっぱり可愛い……。俺は何としても、舞さんを手に入りたい。

思う存分触りたい。そして、思う存分撮影したい)

舞の後ろに、彼女の背中を見つめる男性客達の姿が見えた。

(大人の男達も舞さんを狙ってる。早く何とかしなければ)

頭をかきむしった後、圭太は言った。

「睡眠薬を買おう」

第十五話：手錠購入

深夜十二時。圭太のマンション。PC室。

圭太はパソコンに向かっていた。暗い部屋に、パソコンの起動音がかすかに響く。部屋はしんと静まり返っている。

赤い光が、圭太の顔を照らした。

『確実に撮影』

ようこそ。我がサイトへ。

仲間がいてくれて嬉しいよ。

大人も子供も私は区別しない。

皆、存分に、性欲を満足させるべきだ。

「入り口」

「舞さん……」

圭太はマウスを動かし、「入り口」をクリックした。

三つの選択肢が表示された。

「撮影方法」「撮影手段」「撮影技術」

「撮影手段」に矢印を合わせ、クリックした。

「老人」「大人」「子人」

「子人」をクリックした。

「金銭」「合意」「強制」

「強制」をクリックした。

三つの選択肢が現れた。真っ赤な画面に浮かぶ、三種の物騒な道具達。その姿は、冷徹な処刑執行人を思わせた。

「スタンガン」「手錠」「睡眠薬」

「睡眠薬を買いたいんだ」

圭太は矢印を、「睡眠薬」に合わせてクリックした。すぐに画面が切り替わった。

『買い物力ゴ』

ただいま「睡眠薬」が一箱入っています。

現在のお買い上げ金額は、一万五千円です。

あなたの氏名・郵便番号、住所を入力してください。

「野田圭太」「XHY・GIMS」「T県T市……」

圭太は氏名・郵便番号、住所を入力した。

画面下側に「注文確定」の表示がある。

「注文確定」をクリックした。以前は、ここから「徐々にエスカレーターしてください」の画面へ飛んでしまい、睡眠薬を買えなかった。今夜は上手くいくだろうか。圭太は唾を飲み込み、真っ赤な画面に身を乗り出した。

画面は、なかなか切り替わってくれない。

（早く変われ。『注文ありがとうございます』と表示されろ）

まだ、画面は切り替わらない。

「睡眠薬を買った」

圭太が呟いたとき、画面が切り替わった。思わず覗き込んだ。真っ赤な背景に、白い文字が書いてあった。

「注文不可」

「徐々にエスカレーターしてください」

圭太は、椅子にもたれかかった。

「やっぱり、ダメか。なぜ、睡眠薬を買えないんだ！」

画面に向かって、圭太は問いかけた。このサイトはスムーズに買い物が進まない。苛立ちが募る。

画面は無表情に、「徐々にエスカレーターしてください」という文

字を、圭太に突きつけていた。

「注文不可」

「徐々にエスカレートしてください」

（睡眠薬が欲しいのに）

画面が唐突に切り替わった。以前と同様、何の断りもない。圭太を無視して、自動的に切り替えられた画面には、物騒な道具が一つだけ表示されていた。

「手錠」

「今度は手錠か」

圭太は画面の向こうの、サイトの管理人に向かって言った。

「分かったよ。手錠を買おう。徐々にエスカレートしていけばいいんだろう？」

第十六話：実験にむけて

手錠の到着まで、一週間はかかる。どんな手錠が送られてくるの
だろうか。

刑事ドラマなどで見かける手錠は、相手を拘束するだけの道具
だが、これから届くのは、あのサイトの手錠である。

真っ赤なスタンガンは、威力過剰の危険な代物だった。手錠もま
た、スタンガン同様、何かしらの改造が施されているのだろうか。

だとすると、下手に使えば、舞の命を奪いかねない。

スタンガンと同じく同様、舞に使用する前に、他の女性で実験を
することになるだろう。

その下準備のため、夏休み中盤のこの日、圭太は以前覚えておい
た、町中の女性達を見回ることにした。

午前十一時。国道沿いのガソリンスタンド。

スタンド内には、数台の車が止まっていた。車の燃料ハッチを開
けてノズルを差し込み、店員達が慣れた手つきで給油している。

圭太は自転車を飛ばして、スタンド内に入った。ガソリンとは無
縁の自転車に乗り、一人でスタンドに現れた圭太のことを、男性客
達が物珍しげに見てきた。圭太は彼らの視線は無視して、目当ての
女性店員を探した。スタンド内には、赤いつなぎを着た女性店員達
が数名、給油や洗車をしていた。

「いた！」

圭太は歓声を上げた。以前、記憶しておいた二人の女性店員を見
つけたのだ。さっそく、二人に近づいてゆく。

（可愛いな、二人とも。仲良くなりたいな）。店が終わったら、連
れ出せないものか）

「どうしたの？ガソリンスタンドなんかに来て」

女性店員の一人が声をかけてきた。染め上げられた金髪が似合っ
ている。

「何か困ってるの？自転車がパンクでもしたのかな？」

「そうなんです。タイヤがパンクしたんです」

彼女の言葉に合わせて、圭太はとっさに嘘をついた。

「自転車の乗り心地が、さっきからおかしいんです」

「それは大変だったね。ちょっと調べてみようか」

彼女は、かがんで圭太の自転車を調べ始めた。

「タイヤの空気はちゃんと入ってるね。空気圧も適正みたい」

「そんなはずはありませんよ。乗り心地が、いつもと全然違うんです。故障したと思って、自分で調べてみたんですけど、子供の僕には、どこがおかしいのか分かりませんでした。そのとき、このお店を見つけたんです」

「うーん。どこがおかしいんだろうね？」

どこもおかしいはずはなかった。故障したというのは、彼女と会話をするためのたらめだ。

圭太は、もう一人の女性店員に視線を移した。

目が合ったが、彼女は圭太に興味はないらしい。すぐに視線をはずして、新たに入店してきた客のもとへと駆けていった。

（こいつ一人に絞ろう）

圭太は決心した。

「乗ると、タイヤがガタガタ言っんです。小さな石を踏んだだけでも、強い衝撃を受けるんです。パンクしてます」

「タイヤに異常はないな」。でも、ガタガタ言っんだよね？何でだろうね」

彼女はフレームを調べ始めた。

「フレームもしっかりしているね。どこもおかしい所はないな。いっつからガタガタ言うようになったの？」

（可愛いな）

圭太は、ポケットからデジカメを取り出した。このデジカメは小型軽量が売り物で、相手に気付かれぬように、隠し撮りをするには丁度良かった。

「パチリ……」

シャッターを押した。彼女の背中が写った。それでは満足できずに、自転車を調べる彼女の周囲をせわしなく移動しながら、シャッターを何度も押した。ガソリンスタンドの騒音にかき消されて、シャッターの音は、彼女には全く聞こえていないようだ。

圭太は自己紹介をしながら、十五枚ほど撮影した。

「圭太君、とりあえず、油を差してみようか？」

「お願いします」

そう言って、またシャッターを押した。油を取りに行く彼女の後ろ姿を見送りつつ、デジカメの液晶画面を見る。

（よく撮れてるな）

ガソリンスタンド店員、小林恵の姿が、背中に始まり横顔から胸元まで、くまなく写されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8585a/>

悪魔の棲むホームページ

2010年10月9日06時13分発行